令和元年度
優れた芸術を媒体とした
日独異文化相互理解・交流プログラム
報告書

2019.10.6(SUN)～10.13(SUN)

兵庫県立加古川南高等学校

1　目　　的

（1）　広い視野を持ち，異文化を理解するとともに，これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図る。

（2）　国際理解のためにも，日本人として，また個人としての自己の確立を図る。

（3）　国際社会において，相手の立場を尊重しつつ，自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する観点から，外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を図る。

2　研修期間

令和元年 10 月 6 日（日）～13 日（日）8 日間

3　研修人数

生徒 8 名，引率教員 2 名　合計 10 名

引率教員	原　実男（団長）　　藤居 しのぶ
３年生	松久 茉由（生徒リーダー）
２年生	北村 杏菜（生徒サブリーダー） 長谷川 蛍乃夏（生徒サブリーダー）
１年生	石坂 萌絵　　岡田 桃花　　田村 果鈴　　藤岡 瑞葵　　鶴山 樹香

4　交流高校

フェーリクス・メンデルスゾーン・バルトルディ・ギムナジウム（FMBG）

住所　Eugen-Schönhaar-Str. 18　10407 Berlin　Germany

URL　http://www.mendelssohn-bartholdy-gymnasium.de/

5　協働ワークショップについて

（1） 協働ワークショップメンバー

兵庫県立加古川南高等学校　８名

フェーリクス・メンデルスゾーン・バルトルディ・ギムナジウム　８名

（2） 期間

令和元年 10 月 9 日(水)～10 日(木) 2 日間

（3） 媒体となる作品

ロベルト・シューマン作曲 交響曲第３番 変ホ長調 “ライン”

（4） ワークショップ構成・演出

ブリッタ シューネマン、ヴィルデ あや

（5） 鑑賞日時

令和元年 10 月 10 日(木) 午後 8 時～ ベルリンフィルハーモニー大ホール

（6） 演奏団体

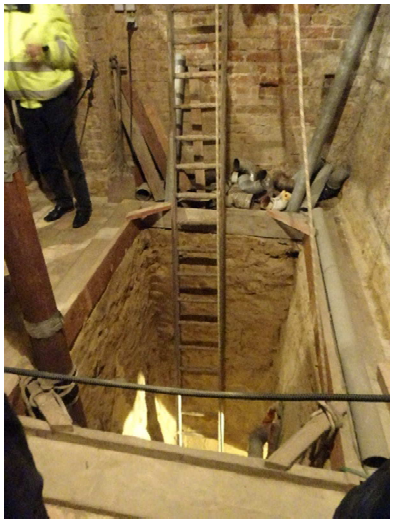
ベルリンフィルハーモニー管弦楽団

6　ホームステイについて

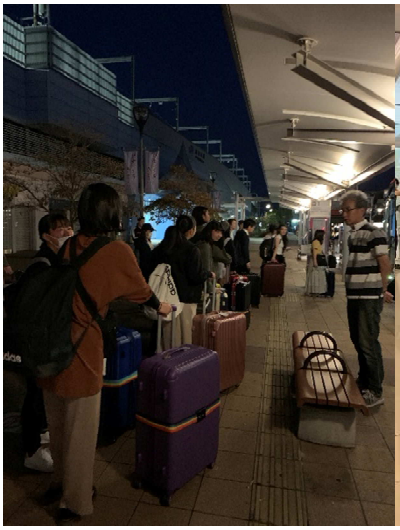
	氏　　名	ドイツ側生徒氏名	学年	ホームスティ先
1	石坂　萌絵		Kl.8g	
2	岡田　桃花		Kl.11	
3	田村　果鈴		Kl.11	
4	藤岡　瑞葵		Kl.8f	
5	鶴山　樹香		Kl.11	
6	北村　杏菜		Kl.8a	
7	長谷川蛍乃夏		Kl.11	
8	松久　茉由		Kl.9g	

7　旅行日程

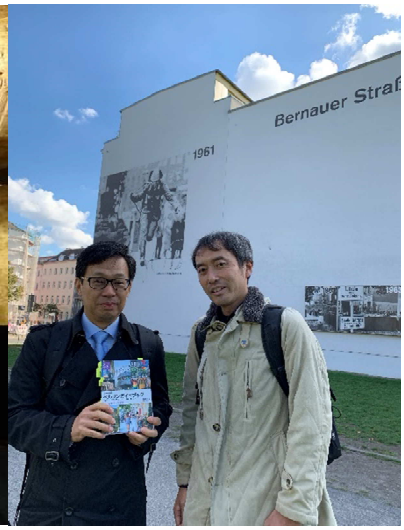
10/6（日）	5:25	JR 加古川駅北口バス停（神姫バス空港リムジンバス）発	
	8:55	関西国際空港発（LH743）	
	13:45	ミュンヘン空港着	
	16:00	ミュンヘン空港発（LH2044）	
	17:05	ベルリン・テーゲル空港着	
	18:00	ベルリン・テーゲル空港発	
	18:40	バスにてベルリン市内へ。ユースホステル着	ユースホステル泊 The Circus Gbr
10/7（月）	午前	ドイツの生徒と市内研修 1） 地下探検ツアー 2） ベルリンの壁沿いを歩いてベルリン博物館へ 3） クロイツベルク区に移動して、屋台で昼食 4） メンデルスゾーンが眠る共同墓地を散策	
	午後	セレモニー（対面式）各生徒はホームステイ先へ	ホームステイ
10/8（火）	終日	各家庭において、ドイツ生活体験	ホームステイ
10/9（水）		協働ワークショップ	ホームステイ
10/10（木）		協働ワークショップ ベルリンフィル管弦楽団コンサート鑑賞 体験感想会	ホームステイ
10/11（金）		セレモニー（ドイツ家庭とのお別れ朝食会） 市外研修（ポツダム観光） ・ツェツィーリエンホーフ宮殿を見学 ベルリン光の祭典を見学	ユースホステル泊 The Circus Gbr
10/12（日）	9:00	ベルリン・テーゲル空港発（LH2031）	
	10:05	ミュンヘン空港着、出国審査	
	12:15	ミュンヘン空港発（LH742）	
10/13（日）	6:20	関西国際空港着	

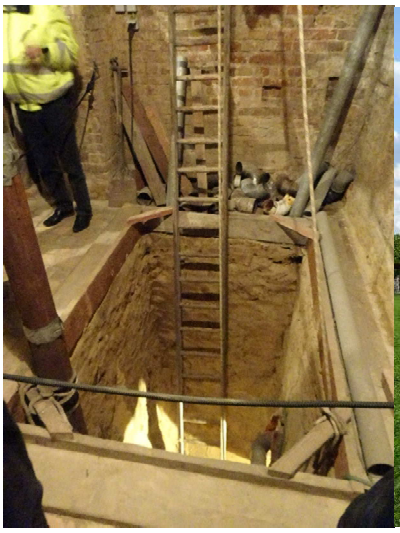


１０月６日（日）JR 加古川駅、関西国際空港、ミュンヘン空港



１０月７日（月）ベルリン市内散策

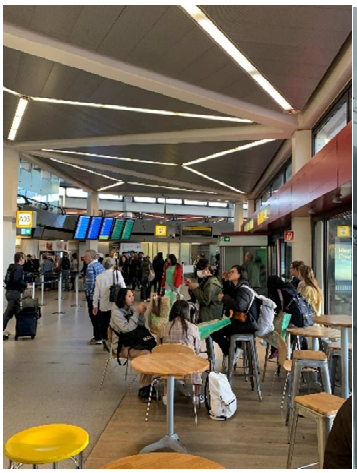


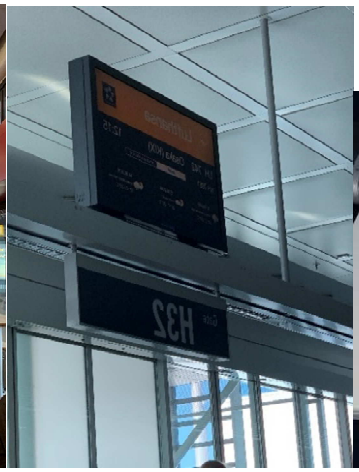


１０月９日（水）１０日（木）　協働プログラム

１０月１１日（金）お別れ会、ポツダム観光

１０月１２日（土）





日独異文化相互理解・交流プログラム　研修報告書

３年５組　松久 茉由

私は１０月６日から１０月１３日までの８日間、ドイツへ日独異文化相互理解・交流プログラムに行きました。初めての海外で不安に思うこともたくさんありましたが、ドイツに行ってから何もかもが自分にとって新しく、とても良い学びになりました。

●１０月６日（日）

朝の５：１５に加古川駅に集合し、５：２５発の関西空港行きの神姫バスに乗り、私たちの日独異文化相互理解・交流プログラムが始まりました。関西空港に到着し、搭乗手続きなどを済ませ、飛行時間約１２時間のミュンヘン空港行きの飛行機に乗りました。機内食を食べたり、雑談をしたり映画を観ていると、長いようで短く、ミュンヘン空港に到着しました。

ミュンヘン空港で入国審査があり、英語で相手の質問に答えることが難しく、苦戦しました。ミュンヘン空港から約１時間飛行機に乗り、ベルリン・テーゲル空港に到着し、Wilde 先生と合流しました。バスに乗り、ホテルに着きチェックインを済ませて、夕食にラーメンを食べました。日本とあまり変わらない味で、とても親しみやすい味でした。その後ホテルに戻り、次の日の支度を済ませ、就寝しました。

●１０月７日（月）

朝の７：００に起床し、７：３０からユースホステルで朝食を食べました。カウンターでオレンジジュースかコーヒーを選び、ビッフェ形式の朝食でした。野菜やプレッツェルやワッフル、ヨーグルトやフルーツもあり、とても美味しかったです。

朝食を終えて、ドイツ側の生徒と合流しました。その時、ホームステイ先の Mara さんと初めてお会いしました。とてもフレンドリーで、初対面とは思えないくらい親しくしてくださいました。そこから、ベルリンの壁の野外展示場に行き、地下探検ツアーに行きました。日本では学ぶことができない、現地ならではのドイツの歴史を学ぶことができました。そして、かつてベルリンの壁があった跡地に作られた壁公園に行きました。現在では、芝生があり、とても落ち着くところですが、３０年以上前に悲しい過去があったと思うと自分が考えなければいけないことがたくさんあるということを実感することができました。

ドイツの歴史を学び、昼食にカレーソーセージを食べました。ケチャップの量やポテトの量がとても多く、驚きました。昼食を食べ終えた後、メンデルスゾーン家が眠りにつく共同墓地を訪れました。チャペルの中には、メンデルスゾーン一族について、一人ひとり詳しい説明がされていました。メンデルスゾーンが書いた楽譜の写真も展示されていて、メンデルスゾーンのことを詳しく知ることができました。その後ホテルに戻り、各ホームステイ先に行きました。Mara さんはお菓子を作ることが好きで、私はチョコレートケーキが好きということを伝えると、家に着いてから、一緒にチョコレートケーキを作ってくださいました。

チョコレートケーキを食べていると、Mara さんの母親が仕事から帰ってきました。そこから夕食の買い出しのためにスーパーマーケットに行きました。冷凍のピザを買い、そのピザの上にさらにサラミとチーズをのせて作ってくださいました。

●１０月８日（火）

朝の７時に起床し、朝食を食べました。ココナッツミルクみたいなものにリンゴやマンゴーなどをのせて食べました。朝食を食べた後、Mara さんと一緒に部屋の掃除をしました。

ドイツ人の方は、とても部屋をきれいにされていると思いました。出かけるまでの間に、日本のお土産を渡しました。具体的に扇子や折り紙、ボールペンや日本の観光地のポストカード、東京バナナ味のキットカットをお土産に持っていきました。すると、とても喜んでくださって嬉しかったです。特に、和紙のカラフルな折り紙を持って行ったので、折り紙を使うのがもったいないとおっしゃってました。また、キットカットがとても美味しかったみたいで、インターネットで同じものが売っていないか探されていました。

その後、午前中はショッピングモールに連れて行ってくださいました。Mara さんは、今度友達とハロウィンパーティーをされるみたいで、ハロウィンコーナーで一緒に買い物をしました。ドイツのハロウィンコーナーでは、展示されているハロウィンの骸骨が日本のものよりはるかにリアルで驚きました。それからバスに乗り、仕事に行っていた Mara さんの母親と合流し昼食を食べました。私が、豚肉が苦手だということを気にかけてくださって、豚肉ではなく鶏肉が使われているお店に連れて行ってくださいました。とても優しいホストファミリーに恵まれて幸せを感じました。そして、午後からは水族館に連れて行ってくださいました。日本の水族館と違い、魚に加えてカエルや蛇などがたくさんいて、驚きました。家に帰ると、Mara さんの母親と Mara さんと私の３人で、チョコブラウニーを作りました。ビターチョコレートを使ってたので苦いと思ったのですが、日本の倍の量のバターと砂糖を使っていたので、とても甘かったです。たくさんの発見ができた一日でした。

●１０月９日（水）

朝の８時に起床し、朝食を食べました。パンにチーズやバターをのせて食べました。そして、ベルリンフィル・コンサートホールに集合して、協働ワークショップが始まりました。

ルールでドイツ語と日本語しか話してはいけなくて、Wilde 先生とシューネマン先生も必要以上に訳してはいけないという条件でした。まず初めに自己紹介のために、全員で円の形になって、サイドステップを踏みながら、リズムよくドイツ語、日本語の順番で自分の名前を言っていきました。その次に、ドイツ人の生徒だけにすることを伝えて、日本人の生徒は、ドイツ人の生徒のジェスチャーで先生の指示したことを理解して行動するというものでした。例えば、身長の高い順に並ぶことや、歳の順、誕生日の順番や兄弟の数のグループ分けなどがありました。これをすることによって、言葉は通じなくてもジェスチャーやアイコンタクトで通じあえるものがあるということを学びました。

その後、日本人がドイツ人に抱いている偏見、ドイツ人が日本人に抱いている偏見を各グループでジェスチャーを使って発表するということをしました。発表してみると、共感できるところもあれば、共感できないところもあったので、それを言葉で伝えあいました。これをすることによって、それぞれが持っていた偏見を解消することができたのではないかと思いました。

ドイツ人と日本人の仲が深まってきたところで、今度は、メンデルスゾーンについて考えました。メンデルスゾーンの曲の第一楽章と第三楽章を聴いて気持ちの変化を線で表すというものでした。これをすることによって、人によって線の書き方が全然違うことを知り、人それぞれ考えていることや音楽の感じ方が違うことを学びました。

●１０月１０日（木）

朝の８時に起床し、前の日と同じ朝食を食べ、協働ワークショップの２日目に向かいました。２日目は、最後のプレゼンに向けてのプログラムでした。

まず初めにメンデルスゾーンにまつわる言葉で、サイドステップを踏みながら、手拍子でリズムをとりました。４人ずつ違うリズムを同時にたたいている時は、他の人のリズムにつられてしまいそう

で難しかったです。その次に、怒るという動作、喜ぶという動作、悲しむという動作を目に見える形で表現するということをしました。なかなか人に伝わることは難しく、自分の思っている以上のことをしないと伝わらないということを身に感じました。

そして、一日目はドイツ人の生徒がドイツ語で伝えられたことを日本人にジェスチャーで伝えることをしたように、二日目は日本人の生徒が日本語で伝えられたことをドイツ人にジェスチャーで伝えました。一日目同様、言葉が通じ合わなくても通じ合うものがあると実感できました。

それが終わると、この日の夜にベルリンフィルハーモニーの演奏で聴く曲の、第一楽章と第三楽章にあわせて日独４人ずつのグループに分かれて、自由にダンスをしました。日独の国は違ってもリズムのとり方が一緒だったりしたので、共通点を感じることができて嬉しかったです。

そして最後に発表するプレゼンの内容の話し合いをしました。テーマは「音楽の旅」に決定しました。発表の内容は、第一楽章と第三楽章の音楽の間に自分たちが２日間学んできたものを演技するというものでした。最初に日本の文化を日独５人で演じました。次に日本人が旅に出る前に感じていた感情を、日本人が演じました。その次に、ドイツの文化を日独５人で演じました。最後は、日本人が抱いていたドイツ人へのイメージの異なる点を日独５人で演じました。演じることによってこの２日間の総まとめができたと思います。

発表を終えて、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団の演奏を聴きました。演奏している方と同じ景色で演奏を聴くことができて、とても感動しました。また、自分たちが２日間協働ワークショップで使わせていただいた曲を聴き、自然と自分たちがしてきたことが頭に浮かびました。また、私は吹奏楽部でクラリネットを演奏していて、オーケストラでクラリネットの音を聴き、自分が聴いたことのない音で演奏されていて、とても感激し、音楽の本場ヨーロッパで聴くことができてとてもよかったです。

●１０月１１日（金）

朝の７時に起床し、お別れセレモニーに向かいました。朝食をホテルで食べて、私たちからの感謝のプレゼントでガチャガチャやはばタンのキーホルダーを渡しました。Mara さんは、はばタンを気に入ってくださってさっそくキーホルダーをつけてくださり嬉しかったです。

その後ポツダム観光へ行きました。ポツダム宣言がされたところを目にして、歴史について改めて考えるきっかけとなりました。そこから、バームクーヘン屋さんに行き、色々な店でお土産を買いました。その後ベルリン光の祭典に行きました。今年のテーマがベルリンの壁崩壊がテーマで、もう一度ベルリンの壁についての思いが込みあげてきました。次の日の帰国の準備をしてから就寝しました。

●１０月１２日（土）●１０月１３日（日）

朝の５時に起床し、空港へ向かいました。ドイツでの貴重な体験や経験を思い出しながら、ドイツから日本へ帰りました。行きと同様、映画や睡眠、雑談をしているとあっという間に関西空港に帰ってきました。日本に着いた直後、あまり日本に着いたという実感が湧かなかったのですが、周りの人が日本語で話していて、日本に帰ってきたということを実感することができました。改めてドイツに行けて本当に良かったです。

●感想

初めての海外で不安に思うことがたくさんありましたが、私はドイツに行くことができて、本当に良かったです。協働ワークショップで、国は違っても心で通じ合えるものがたくさんあるということを学びました。また、そこに音楽が加わることによって、より理解しやすいものになるということも身に感じました。そして、自分たちがほかの国に抱いている偏見は、あてはまっているものもあれば、異なっているものもあるということを知ることや、お互いの文化を言葉ではなく表現で表すこと

によって、異文化相互理解をすることができました。改めて思ったことは、ドイツ人の生徒は思うことがあったり、意見を言う場面があると、とても積極的に手を挙げ発言できていました。一方私たち日本人は、日に日に意見を言えるようになったものの、ドイツ人の生徒ほど積極的に言うことができませんでした。このような反省点や課題点も見つけることができました。

ホームステイをさせていただき、いつも私に気を配ってくださるホストファミリーで、とても嬉しかったし、感謝の気持ちでいっぱいです。また、英語でコミュニケーションをとることの難しさを実感したので、英語のコミュニケーション力も向上させていきたいと思いました。

最後に、この８日間、私たちが日独異文化相互理解・交流プログラムに参加させていただく中で、たくさんの方の支えがあってこそ取り組めたと思います。関わってくださったすべての方に感謝を申し上げたいです。８日間、私たちに貴重な体験と経験をさせていただき、本当にありがとうございました。この８日間の学びを、今後に生かしていきます。

ドイツレポート

２年６組　長谷川 蛍乃夏

１日目

機内では楽しみすぎてあまり眠れなかったです。そのため、着いたときはとても眠たくて、しんどかったです。着いて、重い荷物を手に、バスに乗り、電車に乗り、ふらふらでした。また、早く乗り降りをしないといけなく、とても大変でした。

ホテルについて、ほっとした反面、まだ少し緊張感がありました。夜ご飯は、ラーメンを食べに行きました。日本の味に体も心も温まりました。ホテルの前にある、コンビニに寄った時は、すべてが英語や、ドイツ語で表記されていて、「ドイツに来たのだ」と実感しました。

これから始まる１週間がとても楽しみで、ワクワクしながら就寝しました。

２日目

この日は朝ごはんをホテルで食べました。とてもおいしくて、ドイツの食に対する印象が変わりました。

いよいよペアの子、レアと会う時がやってきて、とても緊張しました。次から次へと、ドイツ人の子が入ってきて、レアはいるかなと探したのを覚えています。そして、レアが来て、とても女の子らしい子で、安心しました。そこからベルリンの壁を見に行く予定だったのですが、レアが体調不良で、帰りに迎えに来てくれるとのことでした。楽しみにしていたので、少し残念でしたし、寂しかったです。

ベルリンの壁を見に行く時間になり、私は一人で歩いていると、「こっちにおいで」と言ってくれたドイツ人の子がいました。私はその時、とても寂しかったので、とても感謝しています。ほかにも英語がわからない日本人のサポートに入ったりしました。自分の英語力が試すことができた、とてもよい経験になりました。

トンネルの中に入って、ベルリンの壁やトンネルのついてのお話を聞きました。詳しくはわからなかったですが、トンネルのおかげで助かった人もいれば、殺されてしまった人もいることは分かりました。また、あの狭いなかで何百日もかけてトンネルを掘ったことには驚きましたし、私には絶対に無理だなと思いました。ベルリンの壁にたくさんの歴史があったことは忘れちゃいけないし、貴重な体験だったなと思いました。

メンデルスゾーンのお墓に行ったときは、はじめは何もわからずに、話を聞いていたのですが、とてもすごい人だということはわかりました。お墓を見たきは、「海外の映画で見たことがあるな」という感じでした。

お昼はとてもおなかがすいていたのですが、あやさんが行きたかったお店が火事になっていて驚きました。しかし、カレーソーセージのお店があり、無事にお昼を食べることができたので、よかったです。注文はペアがいなかったので、北村さんのペアの子が頼んでくれました。

ホテルに帰ると、ホストファミリーみんなで迎えに来てくれていました。スーツケースを持ち、車に向かいました。スーツケースはホストファザーがもってくれました。家までは３０分ぐらいで着くらしいのですが、渋滞で１時間もかかってしまいました。家についてからは、家の中を案内してもらいました。その後すぐにご飯が出てきました。ご飯はパンにいろいろなものを挟んで食べるというものでした。トマトときゅうりのサラダや、豆を煮たもの、ささみ肉、野菜炒めなど、挟む料理はたくさんありました。すべておいしかったです。食事中は、たくさんお話を英語でしました。そして、ホストマザ

ーから英語が上手だと褒められ、自信がつきました。食後には、バームクーヘンを食べました。シナモンが少し入っていましたが、おいしかったです。お風呂に入り部屋にいると、映画を見ないかとレアから誘われ、「美女と野獣」を英語で見ました。

ドイツの歴史も学ぶことができ、またホストファミリーともいい感じだったので、少し安心した 2 日目でした。

3 日目

一日レアと過ごす日がやってきて、とてもワクワクしている反面、誰もいない不安感がありました。

朝 10 時ぐらいに家を出て、バスと電車で約二時間、「MALL OF BERLIN」というショッピングモールに行きました。事前にショッピングがしたいと言っていたので、連れてきてもらいました。たくさんのお店があり、どこに入ればよいかとても迷ったので、日本にもある、「H＆M」や「ZARA」、「無印良品」などを見ていました。するとお土産屋さんや、雑貨屋さんなどを紹介してくれました。お昼になっていたので先にお昼を食べました。その後おすすめのお店などに連れて行ってもらい、服やお菓子などたくさん買いました。そして、ショッピングモールがとてもきれいだったので写真を撮りました。また帰りにスーパーマーケットに寄り、持てない程の買い物をしました。

帰ってきてからは、2 日目と同じご飯を食べ、お風呂に入り、また映画を見ました。今回はレアさんの希望で「千と千尋」を日本語で見ました。

はじめは少し緊張していましたが、次第に慣れてきて移動中にいろいろな話をしてくれました。また、日本語で話してくれるので、とてもやりやすかったです。

4 日目

ワークショップ初日で、とても緊張していました。私は人前で何かをすることは慣れていたので大丈夫だと思っていたのですが、いざその日が来ると緊張と不安で押しつぶされそうでした。

はじめは何をやっているのかわからず、正直とても嫌でした。しかし、足でリズムを刻んで自己紹介をしたり、楽器を使って相手を表現したり、音楽に合わせて自由に動いたり、とても楽しかったです。ダンスの授業でやった、新聞の動きを体であらわすのに似ていました。また、お互いの国への思い込みは、」ドイツについてとても考えましたし、日本についてどういうイメージを持っているのかたくさん知れました。例えば、自分が悪くなくても謝ってしまう点について、「確かに！」と思いました。

お昼には、レアが作ってくれたご飯を食べましたが、量が多く残してしまいました。しかしおいしかったです。

午後からは、音楽に触れることが多くなり、またメンデルスゾーンの気持ちになるなど、難しいことが多かったです。またドイツ人は思ったことを発言していましたが、日本人はあまり発言できなかったり、考えすぎてしまったりしたことが反省点だと思いました。

光の祭典の予定でしたが、日にちを間違えていて、なくなったときはとても混乱しました。また、デモのニュースがあるなど、日本人も混乱していました。価値観の違いで少しもめるなど、少し戸惑いを感じました。

ワークショップが終わった後は、レアの体調もあったのですぐに帰り家の前にある、イタリアンのレストランに寄りました。ピザとポテトをたべ、レアはパスタを食べていました。その日は少し疲れていたので帰ってからお風呂に入り、すぐに寝ました。

5 日目

ワークショップ初日とはまた違う場所でワークショップをしました。解放感のある場所で、とてもよかったです。ワークショップ 2 日目は、特に何をしているのか、結果どういう風になってほしいのかよく分からなかったです。しかし、音楽に合わせて動きをするのは楽しかったです。ワークショップ

初日よりも書くことが多かった気がしました。また、ローベルトシューマンにもふれることが多くなったと思いました。

お昼はみんなが持ってきたものをシェアして食べました。とてもおいしい料理が多く、おなかいっぱい食べました。また、レアが作ってきてくれたパスタはとてもおいしかったので、おかわりもしました。

午後からは、発表に向けて本格的にやるようになり、考えることが多くなりました。お互いの国への思い込みについて発表することになり、少ない時間で練習し、何とか発表することができました。

ベルリンフィルでは、あの近さでオーケストラを聞いたことがないので、圧倒され、ポカーンという状態でした。ヴァイオリンの音色はとてもよく、日本に変えってから、ある程度弾くことができる人のヴァイオリンの音色を聴きましたが、素人ながらに音の違いに気が付きました。とても貴重な体験ができたと思います。

6 日目

朝、ホストファミリーとお別れをし、ポツダム会議が開かれたところに向かいました。すごく時間はかかりましたが、移動中も楽しく過ごしました。

ポツダム会議が行われたところについてから、中村さんの話を聞いて中に入りました。建物自体にたくさんの歴史があり、とても勉強になりました。また、この場所で広島に原爆投下が指示されたと知って、複雑な気持ちになりました。

ポツダムの後、バームクーヘンのお店に行きました。校長先生が注文でとても困っていて、何とか助けることができました。校長先生のおかげで、再びいい経験ができ、自信になりました。

その後はお店で買い物をしたり、光の祭典に行ったりなど、純粋に観光を楽しみました。信号がモデルの雑貨屋では、日本で買い物をする中国人並みに爆買いしました。

ホテルに戻ってパッキングをしていると、最終日という実感がわいてきました。こうすればよかったなど、後悔がたくさん出てきましたが、とてもよい 6 日間を過ごしたと思います。

まとめ

この 6 日間で、現実は甘くないこと、言葉以外にもコミュニケーション手段があること、それらを使う難しさなど、たくさんのことを学びました。前回行ったニュージーランドでは経験できなったことが、ドイツで経験でき、少し怖いこともありましたが、それが現実なのだとわかりました。これらを進学で使えたらいいなと思うし、今回経験したことを、これから日常でも使えるといいなと思います。

日独異文化相互理解・交流プログラム 研修報告書

２年５組　北村 杏菜

私は 10 月 6 日から 13 日までの 8 日間、日独異文化相互理解・交流プログラムに参加しました。

◆10 月 6 日(1 日目)

朝 5 時 00 分加古川駅集合とても眠くすでに時間の感覚がおかしく感じました。その後、バスに乗車し関空に向かいました。バスの中では爆睡でした。

7 時 00 分関空到着。搭乗手続き・セキュリティーチェックをし、出国審査を受けました。思っていたよりも手間がかからなかったけれど、セキュリティチェックで人が多かったのが印象的でした。そして、飛行機に乗るまでの間時間があったので空港内を散策をしました。日本を離れるのは寂しかったですが、ドイツに行けると思うとワクワクしました。

その後、関空を出発し、11 時間 50 分と長いフライトでしたが、機内では映画を見たり、ゲームをしたり、友達と話したりして過ごしました。機内食は 2 回で日本食やドイツ料理などを食べました。フライト時間は長いと聞いていたけれど、意外とあっという間でした。

14 時 00 分ミュンヘン空港到着。入国審査をし、ドイツ国内線に移動して、搭乗ゲートの確認をしました。飛行機に乗るまでに時間があり、少し散策をしました。海外ドラマのような風景でいよいよドイツに来たんだなと思いました。

16 時 00 分ミュンヘン空港出発。およそ 1 時間のフライトでした。

17 時 00 分ベルリン・テーゲル空港到着荷物の受け取りをし、出口ゲートで現地の方とお会いしました。ドイツは日本と気候が真反対で思っているよりも気温が低く、足が震えるくらい寒かったです。また時差ボケも感じました。空港からバスと電車を乗り継ぎ、ユースホステルに向かいました。移動中、街並みがすごく綺麗でした。

19 時 00 分ユースホステル到着。日本のホテルとは違う魅力があり、部屋からの景色も綺麗で思わず写真を撮りました。そこから近くのラーメン屋さんで夕食をとり、少し体が温まりました。ホテルに戻り、就寝しました。初日に一番驚いたことは、入浴の際に、個室のシャワーが 4 つくらいあり、男女の脱衣所が同じだったことです。お風呂から上がると、男性が歯を磨いていることもあり、私は抵抗を感じました。

◆10 月 7 日(2 日目)

7 時 00 分起床、身支度をし、ホテルで朝食

9 時 30 分ホームステイ先の生徒と面会 4 か所市内研修に行きました。一番印象に残っているのは、ベルリンの壁です。想像していた壁とは違い、カラフルで驚きました。また、大きくてなかなかの迫力でした。快晴で初日よりも少し暖かく、空気も美味しく感じ、芝生の上で写真を撮ったりしました。その後、屋台で昼食をとりました。1 つのお皿にカレーソーセージとポテトが盛り付けられていたものを食べました。量が多かったですが、とても美味しかったです。

15 時 30 分ホストファミリーが出迎え。ユースホステルで対面セレモニーをし、その後ホストファミリーとホームステイ先に行きました。全体的に洋風の家で部屋が 3 つあり、日本とは少し違った構造でした。靴を決まったところ置く場所はなく、ホームステイ先の子はリビングで脱いで、廊下に靴を置いていた。夕食は、大きなステーキとポテトサラダを食べました。ステーキはあまり温かいもの

ではなかった。電子レンジがなかったので温める習慣がないのかなと思った。またポテトサラダが日本人と見た目が違い、味もさっぱりしていました。

◆10 月 8 日(3 日目)

ホストファミリー先で 1 日生活。8 時 30 分起床。身支度をし、朝食。ドイツで親しまれている堅めのパンと温かいお茶でした。全体的に日本と似ている感じがしました。

10 時 00 分ホームスティ先の生徒と買い物。この日は 1 日ホームステイ先の生徒に人気のお店などを案内してもらいながら買い物をしました。特に雑貨屋に行き、そこでおみやげを買ったり、少し観光もしました。どのお店も 1 つ 1 つがおしゃれで、映えでした。お昼はレストランでピザを食べました。日本のものよりも大きく、それだけでお腹が膨れました。

昼食後、午前と同じように買い物をしました。夕方になりホームステイ先の生徒の親も合流し、喫茶店のような場所で夕食をとりました。レタスやトマト、肉が挟まったボリュームのあるハンバーガーを食べました。生肉を切り、焼いているところを見ることができて、めったにない貴重な時間でした。

夕食後、ホストファミリーと高いビルの屋上のバー(クラブ的な場所)に行きました。そこは大人ばかりで少し怖かったですが、オレンジジュースを飲みながらホストファミリーと夜の景色を楽しみ、写真も撮りました。

◆10 月 9 日(4 日目)

8 時 00 分起床身支度をし、朝食 3 日目と同じ朝食をとりました。

10 時 00 分ベルリンフィル・コンサートホールに集合電車とバスを乗り継ぎ、コンサートホールに向かいました。45 分程度かかり少し長かったですが、ホームステイ先の生徒と今日の内容など話しながらコンサートホールに向かいました。

コンサートホールは、とても広くて空気感が違いました。そしてワークショップが始まりました。どんなことをするのか詳しく知らなかったので、とてもワクワクしていました。部屋に入り、まず日本の生徒とドイツ側の生徒で円になり、体で表現しながら自己紹介をしました。普段体を使って自分を表現することがないので少し戸惑いました。その後、ロベルト・シューマンについて学び、体を使ってその場面を自分で表現するなど自分がしたことないことだらけで、最初はなかなか自分を出して思いっきり表現することができなくて、時間が過ぎるのが遅く感じたけれど、最後になるにつれてちょっとずつ自分の表現ができるようになり、楽しむことができました。

昼食は各ホームステイ先から 1 品ずつ持ち寄り、ビュッフェをしました。そこでは、りんごをまるかじりしたり、生のキャベツやにんじんなどを切ってタッパーに入れ、そのまま持ってきて食べていて思っていたのと少し違ったので驚きでした。

17 時 00 分ワークショップ終了帰る時にスーパーに寄り、お菓子などを買ってホームスティ先に帰宅しました。

◆10 月 10 日(5 日目)

8 時 00 分起床身支度をし、朝食 3、4 日目と同じ朝食をとりました。

10 時 00 分集合 30 分電車とバスを乗り継ぎ、集合場所まで行きました。この日はとても寒く、いつもより風が冷たかったです。集合場所に着き、4 日目とは違う場所で新鮮でした。2 日目のワークショップが始まりました。午前中は体を動かして表現したり、リズムとりをしたりとドイツ側の生徒と何かをすることもあり、日本語が使えないので、英語を使ったり、身振り手振りで物事を伝えるのにすごく苦戦しました。でも、伝わったときはすごく嬉しかったです。

昼食は 4 日目と同様、ホストファミリーから 1 組 1 品ずつ持ち寄りビュッフェをしました。4 日目

とは違い、日本と同じパッケージのおにぎりを食べたり、ドイツ側の生徒が作ってくれたハンバーグを食べたり、少し日本食っぽいものを食べました。おにぎりは、日本にはない鮭とわさびの組み合わせのものを食べ、最初は戸惑ったけど食べてみると思っていたよりも合い、美味しかったです。ハンバーグはまったく日本と同じ味がして、そのまんまでした。デザートにガトーショコラを食べ、とても濃く、丸々全部食べると胃がもたれてしまうぐらい濃かったです。

午後は、この2日間のワークショップを締めくくる発表会の準備をしました。日本人2人とドイツ側の生徒2人の4人で4つのグループとプラスもう1つ日本人だけのグループも作り、各グループ違うテーマで発表しました。私は「日本の文化」と「日本からドイツに来るまでの旅」について発表しました。最初は、どういう動きを使って表現するのかなどコミュニケーション1つとるのも難しかったけれど、紙に書いたり、体で表現したりして自分の意志を伝え合い、1つの作品を作り上げました。日本人だけで発表する作品は、やはりスムーズにいき、思っていることもすぐ伝わるので、やりやすかったです。発表するのも、ドイツ側の生徒と発表するほうが緊張し、日本人だけで発表する時はなぜか安心して出来ました。終わった後、すごく達成感を味わいました。その後、駅のパン屋さんで夕食をとりました。種類が豊富で美味しかったです。

20時00分ベルリンフィルハーモニー管弦楽団演奏会の開始。会場に入ると思っていたよりも人が多く、大きいホールで鳥肌が立ちました。演奏しているすぐ後ろで聴き、1つ1つの音に自分の感情が動かされ、その曲の中に入り込んでしまうぐらい迫力があり、感動しました。めったにない機会なので、とても良い体験ができてよかったです。

22時00分演奏会終了演奏が終わり、そのままホームステイ先の生徒と一緒に帰宅しました。

◆10月11日(6日目)

6時30分起床

8時00分ホテル集合。最後の朝食はホテルでホストファミリーと朝食会をし、お別れセレモニーをしました。ホームステイは意外とあっという間ですごく寂しく感じました。朝食の後、プレゼントを渡し、集合写真を撮ってお別れをしました。その後、ポツダム観光と買い物をしました。ポツダムで少し観光をした後、ベルリンの有名なバームクーヘン屋さんに行ったり、お土産を買ったり、買い物をしました。有名なバームクーヘン屋さんは外見からおしゃれで、入ってみるとバームクーヘンやケーキなどが売ってあり、1つ1つが美味しそうでした。買い物では、雑貨屋、本屋、日用品や文房具など色々なものが売ってある店などに行きました。どのお店も日本とは違う雰囲気で、日本に売ってないものもたくさんあり、見ているだけでもワクワクするようなお店ばっかりでした。

夜は、ベルリン光の祭典に行きました。色々な国の人が集まり、ベルリンの有名な建物がライトアップされ、普段見れないような綺麗さでした。特にブランデンブルク門は次々に違う色でライトアップされ、とても印象的に残っています。

◆10月12日(7日目)

早朝にホテルを出発して空港に着き、いざ日本に帰るとなると、少しドイツが恋しくなりました。飛行機を乗り継ぎ関空に到着した時、ドイツを出発した時も日本に到着した時も朝で体が重く、時差ぼけも感じたけれど、日本に着いてホッとしました。

◆感想

私はこの日独国際交流プログラムで、ドイツの文化やコミュニケーションカを得ただけではなく、今回のプログラムでメインのワークショップを通して、新しい自分を知ることが出来ました。日本とドイツでは7時間の時差があり、生活スタイルが違うので最初は慣れなくて苦戦しましたが、徐々に慣れていきドイツの文化など様々なことを学ぶことができました。発言の仕方では、日本人は思った

ことを一旦考えてから発言するけれど、ドイツ人は思ったことをそのまま発言するのでその姿にとても驚きました。

にワークショップでは２つのことを得ました。１つ目は、数多く自分を表現することで、新しい自分を知ることができました。その新しい自分を今後少しでも生かせていけたらいいなと思います。２つ目は、コミュニケーションの手段は１つではないということです。今回、言葉を使わずに体だけで表現する機会がたくさんあり、コミュニケーションは言葉だけが全てではないということを学びました。

このプログラムに参加した１週間すごく充実した日々を過ごすことができました。今回学んだことを将来につなげていきたいです。

≪日独異文化相互理解・交流プログラム≫

１年１組　石坂 萌絵

✸10 月 6 日

ドイツの方たちと上手くコミュニケーションとれるか心配だけど頑張ってしようと思いながら出発しました。関西国際空港から乗り 11 時間 50 分飛行機に乗りました。最初は、とても長く感じていたけれど映画を見たり寝ていたら気づいたころにはあと 1，2 時間で着くぐらいになっていました。機内食も 2 回出て 1 回目はまあまあ美味しい感じだったけれど 2 回目はえっ？って戸惑う感じの味でした。でも、ドイツの料理って感じがしたので今から行くんだ！と実感が湧きました。

ミュンヘン空港で簡単な質問をされるときとてもドキドキしました。「Where are you going?」と「How many days will you stay over there?」の二つを質問されました。なんとなく聞かれていることが分かったので答えれました。ミュンヘン空港からベルリン・テーゲル空港まで 1 時間ぐらいで着いてバスに乗りユースホステルまで行きました。想像していたホテルと違って部屋内もキレいで外の雰囲気も見れて良かったです。夜ご飯はチャーハンを食べました。時差＋飛行機で寝たのがあったのでで寝れるか心配だったけれど寝れました。

✸10 月 7 日

ホテルで朝ご飯を食べました。とてもおいしかったです。

ご飯を食べた後、ドイツ人の生徒とお会いしました。私の相手の子は、Ａｉｋｏさんでした。みんな、集まった後、市内研修に行きました。初対面なので人見知りが出ないように頑張って話すようにしました。この日は、地下探検ツアー・ベルリンの壁沿いを歩いてベルリン博物館・クロイツベルク区で昼食・メンデルスゾーンが眠る共同墓地を散策しました。地下体験ツアーでは、初めて見たものしかなくてすごいなぁってなりました。人間が掘ってそれを通って移動してたと知ってびっくりしました。実際に掘ったところはどのようになっているのか見ました。人間が作ったと思えないぐらいすごかったです。ドイツ語で説明しているのを翻訳してくれる人がいてくれたのでなんとなくだけどわかりました。

そのあと、ベルリンの壁の跡地に行って実際のベルリンの壁の絵や高さ、壁の位置を見ました。みたいなって思っていたので見れていい機会になりました。たった一つの壁で西ドイツと東ドイツが区切られていたと思うと家族が離れ離れになっていた人たちは、可哀想だなって思いました。そこで、知らない外国人に急に話しかけられてびっくりしました。パートナーの子と写真を撮ったりみんなで撮ったりしました。

そのあと、昼食を食べました。フライドポテトとウインナーを食べました。量的にはあまり多くなかったけれど脂っこくて胃もたれをしました。フライドポテトにはケチャップがかかっていてケチャップの味も日本とちがう感じがしました。ウインナーは普段あまり食べないので食べれて良かったです。これも日本と味が違う感じがしました。ドイツはウインナーが有名なところなので本場の物が食べられて良かったです。

食事の後、メンデルスゾーンが眠る共同墓地にいきました。メンデルスゾーンの事を全然知らなかったのでお話が聞けて良かったです。いろんなことがおきていたんだなぁと思いました。そして、ホテルに戻って荷物を取りに行きました。

この日からホームステイで家に行くまでとても緊張しました。家に行くとマンションできれいな家

でした。お風呂場とトイレが一緒の場所にあったり、ベランダが二つあったり、いろいろ自分の家と違うところがあっておどろきました。夜ごはんはホストマザー・お兄さん・弟・aiko さん・私の５人でたべました。何が出てくるのかドキドキしました。初めて食べるものがでてきて、食べれるか心配になりました。食べれる味だったので良かったです。Aiko さんの部屋に戻っていろんなお話をしました。家族みんな英語も日本語も話せなくて少し不安になりました。でも、なんとかうまくコミュニケーションが取れました。

✸10 月 8 日

それぞれのホストファミリーで生活する１日でした。先輩のところと朝から一緒に行動でした。４人でテレビ塔のところへ行ったり有名なお店に行ったりしました。雨が１日降っていたので写真などたくさん撮れなくて残念でした。信号のマークのお店はとても可愛くておしゃれでいってよかったです。360 度時計になっていて各国の時間が分かる時計があってびっくりしました。ベルリンの絵が描かれたポストカードや建物が描かれたポーチ、磁石、スノードームなどたくさんありました。

お昼ご飯は、ピザ屋さんに行きました。日本のピザはあまり大きくなく食べれるサイズだけどドイツのピザは予想外に大きくてびっくりしました。先輩と半分ずつしたけれどそれでも食べきれない量でした。そこで、びっくりしたのがお金を机の上に丁度の金額を置いて退出したことです。日本ではありえないことだったので衝撃でした。

そして、その近くがブランデンブルク門だったので行きました。その行く途中にピエロと写真を撮りました。すられそうで少し怖かったです。ブランデンブルク門は名前は知っているけれどどんな建物か知らなかったので見れてよかったです。白くて大きくて近くまで行ったのでくぐりたくなりました。

そのあと、また買い物に行きました。行く前に聞いていた、トイレにお金がかかるのをこの時に実際に体験しました。男の人が私達やそのほかのお客さんからお金をとっていてすごい文化だなぁっとおもいました。たくさん買い物ができて充実した１日になりました。

夜ご飯は、お母さん・お父さんと合流して食べに行きました。とてもおいしいところでまた食べたくなりました。食べた後、１０階にあるバーみたいなところに行きました。子供が入ってていいのか不安になるぐらい大人しかいなくて、びっくりしました。でも、そこから見た夜景はとてもキレかったです。家に帰ると１１時ぐらいでした。たくさん歩いていろんなところに行ったりしたのでとても疲れました。

✸10 月 9 日

この日は、ベルリンフィル・コンサートホールで協働ワークショップをしました。初めてする体験だったのでどんな感じなのか想像がつかなくてわくわくしていました。

始まって最初にしたのかサイドステップをしながらドイツ語と日本語で自己紹介でした。ドイツ語で自己紹介するのは、発音が分からなかったり、なんて言ったらいいのか分からなかったりしたので難しかったです。それが終わったら次は、ある手紙を読んでどう思ったかを言葉を使わずに体や手を使って表現する課題でした。普段、文を読んでも感想などは言葉で相手に伝えているけれど言葉がつかなかったので表現するのにどうすればいいか悩みました。全員のを見ると個性が合って面白かったです。

お昼はお弁当をもってホール内で食べました。スイーツを作ってきてくれたドイツ人の子が居て凄いなぁと思いました。私が aiko さんから渡されたものはにんじん・リンゴ・きゅうりが生で入っているものとサンドウィッチとパンでした。サンドウィッチとパンはとてもおいしかったけれど、生のにんじんなどは、ちょっとおなかを壊しそうで食べれませんでした。日本人と各家庭の雰囲気など語れて楽しい時間でした。

お昼が終わった後は、日本人から見てドイツはどんな感じなのか、逆にドイツ人から見て日本はどんな感じなのかを表現して伝えあう時間でした。私達が、ドイツといえばイメージすることは色々あってビールをよく飲む・化粧など OK・背が高いなどでした。実際にドイツ人側も確かにそうだなっと賛成してくれるところもあったけれど違うところもあって第一印象だけでドイツはこんなところ！ときめてはいけないなっと思いました。そのあと、旅に出る準備をする設定でどんな荷物を入れていくかゲームみたいな感じでしました。手紙や服、靴、自分の大切なものなど各自考えて入れていきました。それも、相手がみて何を入れているかが、分かるようにしなければダメだったのでどう表したらよいか考えました。みんな独自の表し方をしていて見ている側も楽しくなりました。最後には音楽を聴いて、線上で表してみようという課題でした。上がり下がりがあまりない時やリズミカルなテンポの時があってそれも個性で書かれていて交換した時に他人のを見ておもしろいなぁっと思いました。

その日の夜は、ハンバーグとジャガイモをすりつぶしたものがでてきました。ハンバーグはとてもおいしかったです。

✸10 月 10 日

協働ワークショップ二日目でした。一日目と違って最初は「１は普通に歩く・２は少し小走り・３は走る・４スローモーション・５とまる」といったゲームをしました。

指示する人が言うことをよく聞いて番号にあった行動をするのはゲームを大人数でしている感じでした。何回もしてそのたびに表情をつけなさいといわれてその行動にあった表情をするのは難しかったです。特にスローモーションのときは表情だけ普通に動いていてはダメだったので苦労しました。つぎに、一人の人が主として動いてそれをみんなでマネするゲームをしました。主として動いている人ばかりみんなが見るとすぐ誰かわかってしまうので違う人を見ながら合わせるのはたいへんでした。誰が主として動いているか充てる側もしましたが回数を繰り返すとみんなうまく動いていて誰が主なのかあてることができませんでした。あえて自分だけ早くしたりするなど工夫するともっとわかりずらくなるのかなぁと思いました。その次に、キャッチボールをしました。室内ですると距離を考えないといけないので投げる強さを考えてしました。最終的にはボールを持たないでボールがあるとイメージして投げるゲームもしました。１対１でするのはとても簡単でしたが２対２・５対５になってくるとみんなで、合わせないといけなかったので難しかったです。５対５をした中で一番難しかったのがひとりが手が使えなかったり、車いす状態であると想定してキャッチボールをするのが難しかったです。見えないものをあると想定してするという機会は今までにしたことがなかったのでいい経験になりました。

そのあとは、お世話になったホストファミリーにこの２日間の協働ワークショップでしてきたことを言葉を使わずに体で表現して伝える発表会のために自分たちで意見を出し合って題を決めて各グループどんなことを表現するか話し合いました。４つのグループが表現することを全部つなげて完成させるのには時間が十分に足りなくて本当に伝えてきれるかな、って思う部分もあったけれど何とか本番では出来たので良かったです。

この協働ワークショップをしたことで言葉を使わなくても体で表現すれば相手に伝わるんだなぁとおもいました。今までにない経験だったので出来るか心配なところもあったけれど回数を繰り返せば出来るようになりました。

おわってから、パン屋さんに行って夜ご飯をたべました。チーズとハムのパンを食べましたがとてもおいしくてまた食べたくなりました。２０分しか食べる時間がなかったのがすこし残念でした。

そしてこの日の最後は、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団の演奏を聴きに行きました。管弦楽団の演奏を聴くことなんて本当になかったのでとても感動しました。いろんな楽器があったなかでも一番印象に残っているのはバイオリンです。すごくきれいな音で聴いていて鳥肌がたちました。こんなに美しい演奏が聴けて本当に充実した一日でした。オーケストラの真後ろの席で見れたのもよかった

です。

✸10 月 11 日

ホストファミリーやパートナーの子とお別れ会でした。朝食を一緒に食べてプレゼントを渡してお別れをしました。会話はあまりできなかったけれどご飯の時やテレビを見ているときなど楽しい時間がたくさんあったので良かったです。

お別れをした後は、有名のバームクーヘン屋さんに行ったりお買い物をしたりしました。バームクーヘン屋さんはおしゃれな建物で中に売っている商品も可愛くて何を買うか悩みました。ケーキも売っていて、私はレモンチーズケーキをたべました。とても美味しかったです。お買い物はたくさん買いました。絵柄が可愛いメモ帳や付箋などいっぱいあってどれも欲しくなりました。買い物が終わった後ブランデンブルク門のマッピングにいきました。8 日に見たブランデンブルク門とまた雰囲気が違いました。今回のマッピングのテーマは「壁の崩壊」みたいな感じでした。ハートが映されたり壁を崩壊しているところの絵か映されたり、今回は 30 周年だったので 30 周年と書かれた絵が映されたりなど見ていてすごい！と感激するものばかりでした。

この日の夜は、みんなでパーティーをしました。最後の夜だったのでワイワイしながらみんなで夜を楽しみました。

✸10 月 12 日

起きたら集合時間の 10 分前で焦りました。空港に行ってまだ時間があったのでまた色々買いました。今までにないぐらいお金を使いました。また 11 時間 50 分の飛行機に乗って帰らないといけないと思うとしんどいなーと思いました。日本に着いたら、やっぱり日本は平和だなぁと思いました。

日独国際交流プログラム　報告レポート

１年５組　鶴山 樹香

研修期間：10 月６日(日)～10 月 13 日(日)

私は日独国際交流プログラムに参加しました。ドイツに行く前は、とても楽しみな気持ちと緊張や不安な気持ちが混ざり合って複雑な気持ちでした。以下の内容は、日にちごとの出来事や思ったことなどについて書きます。

〈10 月６日〉

出発当日、朝５時１５分に加古川駅に集合でした。私は、自分が今からドイツに行くという実感が湧かなかったです。見送ってくれたお母さんと別れてリムジンバスに乗るとき、すこし悲しかったです。

約１時間リムジンバスに乗り、７時ぐらいに関西国際空港に着きました。関西国際空港に着いてから、東武トップツアーズの方に飛行機のチケットを受け取りました。その時に、やっとドイツに行くという実感が湧いてきました。

荷物を預けるところでは、スーツケースの重さが２３ｋｇを超えていないか心配でしたが、思っていたよりも余裕があったので安心しました。セキュリティチェックのときには、液体は持ち込みが禁止されていて、まだ残っている飲み物などをゴミ箱に捨てないといけなかったので、買わなくても良かったなと思いました。金属探知機を通るとき、特に何も持っていなかったけれど無駄に緊張していました。セキュリティチェックが終わり、先に進むとたくさんブランドの店などが並んでいて、すこしテンションがあがりました。

飛行機に乗るまで１時間程度ありました。自由時間だったので、セキュリティチェックのときに捨ててしまった飲み物や飛行機内で食べる用のお菓子を買いました。この自由時間の時に、今回の国際交流プログラムの参加者の中で話したことのない先輩や同学年の人と話せたので仲を深めることができ、より国際交流プログラムが楽しみになりました。また、嬉しく思ったし安心しました。

飛行機に乗ったとき、前の座席の背もたれにテレビがついていて、座席は狭いけれど快適だなと思いました。今から１１時間も飛行機に乗ると考えたら、すこし憂鬱な気分になりました。飛行機に乗っているとき、私は隣に座っていた小学生の男の子と話しました。その子は、１１歳なのに１人でロンドンに行き、寮生活をすると言っていたので、すごく驚きました。日本の学校を休んでプロのテニス選手になるために練習をしにいくそうで、私は勇気があってすごいなと感心しました。

ミュンヘン空港に着いてからまずはじめに入国審査がありました。私は、全然英語が分からないので質問の意味が理解できず、とても困りました。私が応答に困っていると、入国審査の人が少し怒っていて怖かったです。ですが、なんとか入国できたので良かったです。このとき私は、「あー、もっと英語ができるようにならなあかんな。」と思い、英語を１から見直そうと思いました。

次に、ミュンヘンで飛行機を乗り換えてベルリンへ行きました。飛行機を降りたあと、Wilde 先生と合流してユースホステルに行きました。ホテルのお風呂が男女兼用だったのでびっくりしました。トイレやお風呂の中の壁がサーカスの柄だったので面白かったです。全員で食事をしたあとにホテルに戻ると、どのベットで寝るのか話し合い、お風呂に入って明日の用意をしてからふっかふかのベッドですぐに寝てしまいました。

〈10 月 7 日〉

朝は、７時前に目が覚めました。すこし肌寒かったです。ユースホステルで朝食を食べました。ミューズリーという食べ物があり、食べようと思いましたが残してしまいそうだったので食べませんでした。プレッツェルは、とても大きくて塩の味がしました。ハムも、日本のハムと違う味でおいしかったです。

朝食を終えたあと、自分たちの荷物を地下室に預けました。そのあと、ドイツの生徒さんが来るのをホテルで待ちました。私は、自分のペアの子とコミュニケーションをとれるかどうか不安でしたが、会えるのが楽しみでワクワクしていました。

私のペアの子の名前はソフィアちゃんです。実際に会った時は、緊張していてメールしていたときみたいには話せませんでしたが、お互い改めて自己紹介をしました。「私は英語が話せません。」と英語で伝えると、ソフィアちゃんは日本語で話しかけてくれました。日本語で会話をするのは難しいはずなのに、笑顔で話しかけてくれてとても嬉しかったです。私も、英語が苦手でも単語を使う努力をしようと思いました。

ドイツの生徒さんがそろったあと、みんなで市内研修をしました。ベルリンの壁があった当時に、逃げるために掘られたトンネルの地下探検ツアー・ベルリンの壁沿いを歩く・メンデルスゾーンの共同墓地の散策などをしました。地下探検ツアーで当時の話や出来事を聞いて、驚くことや感心することがありました。街には、ベルリンの壁が一部だけ残っているところがあり、壁をみたとき「たかっ！　この壁を超えるのはほぼ不可能だな。」と思いました。またメンデルスゾーンの墓地を見たときは、ハロウィンの絵に描いてあるようなお墓があったりして日本と全然違うなと思いました。昼食は屋台で「カリーヴルスト」というドイツの料理を食べました。ポテトとソーセージにたくさんケチャップがかかっていて味が濃かったです。ちょっと食べただけですぐにお腹がいっぱいになりました。とても美味しかったです。

市内研修が終わり、ホテルに戻るとソフィアちゃんのご両親が迎えに来てくださっていました。ご両親に英語で自己紹介をしたときに、ソフィアちゃんのお母さんがカタコトの日本語で「はじめまして」と挨拶をしてくださってすごく嬉しかったです。挨拶が終わってから、ソフィアちゃんのお父さんが私のスーツケースを家まで持って帰ってくださりました。私とソフィアちゃんとソフィアちゃんの彼氏さんの３人でテレビタワーの下のデパートに行きました。そこですこしお菓子を買って帰りました。買い物をしているあいだちょっと気まずくて困りましたが、美味しいお菓子を教えてくれたりして少しずつ慣れました。

家に着いたとき、ご両親が歓迎してくださりました。ソフィアちゃんと、ご両親に日本のお土産をプレゼントすると、思っていたよりも喜んでいただけたので良かったです。ソフィアちゃんとご両親にもプレゼントを貰いました。美味しそうなチョコレートで嬉しかったです。夕食は紫キャベツを炒めたものとジャガイモを潰したものと、ソーセージでした。ご飯を食べたあと、お風呂に入りました。お風呂からあがり、パジャマに着替えると、お父さんとお母さんがドイツ語で「おやすみ」と言われたので私もドイツ語でおやすみと言いました。私はソフィアちゃんのベッドで寝て、ソフィアちゃんはソファーで寝ていました。気を遣ってくれて感謝している気持ちと、なんか申し訳ないなという気持ちでした。

〈10 月 8 日〉

３日目は、丸一日自由の日でした。朝ごはんは、固めのパンと、いちごジャム・チェリージャム、生野菜、スクランブルエッグでした。朝ごはんを食べたあとに出かける用意をして私たちは、田村さんペアと岡田さんペアと合流し、タピオカのお店に行きました。私はタピオカミルクティーを飲みましたが、日本のタピオカミルクティーと味が違っていました。そのあと、スターバックスに行きました。キャラメルフラペチーノを頼みました。Tall サイズを頼みましたが、日本のスターバックスで買

うTall サイズよりも大きかったです。屋根のある場所で、中高生ぐらいの人たちがダンスをして遊んでいました。ソフィアちゃんも踊っていて、ダンスが上手でした。日本にはない光景で、見ていて楽しかったです。そのあと、田村さんペアと別れました。そして、ソフィアちゃんの友達が合流して新しい教会を見に行きました。教会の前にいくつかの顔写真とお花が置いてありました。ソフィアちゃんにこれは何なのかと聞きました。１年前にトラックが突っ込んで数人の人が亡くなったそうで、その日がちょうど 10 月８日だったそうです。それで、亡くなられた方の遺影が飾られていたそうです。家に帰ると、ソフィアちゃんのお母さんがハート形のケーキを作ってくださっていました。

〈10 月 9 日〉

朝ごはんは、固めのパン、チーズ、ハム、バター、いちごジャム・チェリージャム、生野菜、チョコプリンでした。この日は、協働ワークショップの日で、ベルリンフィルのコンサートホールの一部屋をお借りして協働ワークショップをしました。

ベルリンフィルに所属されているバイオリン奏者の方にお会いし、道を聞く機会がありました。本番の演奏しているところをみて、この日にあった人だと気づきました。協働ワークショップでは、顔や体で表現するのはすごく難しかったけれど、ジェスチャーで伝えるのは楽しいと感じました。「ライン」という曲を聴き、その曲調に合わせて自分の思うように線を引くのが個人的に面白いなと思いました。自分は滑らかに線を引いていても、ほかの人は複雑な線だったりして面白かったです。

〈10 月 10 日〉

朝ごはんは、固めのパン、ハム、ソーセージ、バター、スクランブルエッグ、チョコプリンでした。この日は、2 日目の協働ワークショップの日でした。昨日と違ったのは、部屋が広くかったので行動範囲が広がり、動きやすかったです。違うリズムを同じタイミングでたたきはじめ、4 つのリズム構成で 1 つのリズムが出来上がりました。していて楽しかったですが、ばらけていてよく分からなかったです。

協働ワークショップを終え、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団の演奏をすぐ後ろの席で聴きました。動画などでオーケストラを見て聞いたのと、生で本物のオーケストラを観て聴いたのでは全然聞こえ方が違って迫力がありました。とても立体的で一つ一つの楽器の音がきれいに混ざっていて、こんなレベルの高い演奏ができて羨ましく思ったし、真似してみたいと思いました。この日でホームステイが最後でとても悲しかったです。最後の日だったので、一応持ってきていた日本のカップラーメンやお味噌汁の素、ハイチュウなどをあげました。とても喜んでもらえたので私も嬉しくなりました。

〈10 月 11 日〉

この日はお別れセレモニーをし、ユースホステルでみんなと一緒に朝ごはんを食べました。朝ごはんを食べたあとに、ペアの子にプレセントを渡しました。ソフィアちゃんは日本語で「ありがとう」と言っていました。

このあとに、市外研修をしました。まずは、ポツダム会談が行なわれた宮殿に行きました。敷地に入って最初に目に入ったのは、花壇に描かれた星のマークです。星の周りの花が咲くと赤色なると聞いて、見てみたいなと思いました。そのあとにショッピングをしました。ドイツならではのものを買うことができてよかったです。

夜には、ホテルでパーティーをしました。たくさん話をして思い出を語りました。明日で夢のようなドイツの旅が終わると思うと、寂しい気持ちになりました。

〈10 月 12 日・13 日〉

この日は、５時くらいに起きました。朝早いのに、ソフィアちゃんとお母さんがホテルから空港までついてきてくれて、最後の最後まで見送ってくれて本当に嬉しかったし、お別れするのがとても悲しくて涙が止まらなかったです。空港でソフィアちゃんのお母さんから頂いたぬいぐるみは、すごくかわいかったです。

加古川に着いたとき、全然久しぶりな感じがしなかったので不思議な気分になりました。日本に帰ったらサイゼリヤの料理が食べたかったので連れていってもらいました。あぁ、普通だなと思いました。

まとめ

- 日本の当たり前のことを日本人も気づけていなかったとこがあった。
- 異文化に触れることで日本の良さを改めて実感することができた。
- 言葉だけでなく体で表現するのも大切だと思った。

日独異文化交流レポート

１年１組　岡田 桃花

私はドイツで１週間異文化交流をしてきました。

１日目は朝早くに起きて、バスで移動して空港に行きました。その間もずっとわくわくしていました。空港についてからは楽しみが大きくて、テンションが上がってました。飛行機では映画を見たり、ゲームをしたり、横の席の子と話したり、外の景色を見て撮ったりしました。

ミュウヘン空港について降りてみると寒くてびっくりしました。やっとドイツに来たんだなーって思えました。ベルリン・テーゲル空港についてからはあやさんと会ってバスと路面電車に乗ってユースホステルにつきました。ホテルはとてもきれいで日本のホテルよりも良かったです。そして、夜ご飯を食べに外に行きました。ラーメンはドイツ人向けに作られていたけど美味しかったので日本が少し恋しくなりました。ホテルに戻ったらお風呂に入ったり、部屋の写真を撮ったりしていました。お風呂は男女混合でそこが不満でした。だいたい、23 時ぐらいに就寝しました。

2 日目は 6 時半に起きて用意をしながら 1 時間過ごしました。ホテルの朝食は、ワッフルやチーズとトマトのやつなど普通ははでこないものだったのでうれしくなりました。

そのあとドイツ側の生徒が来てベルリンの壁を見た後、地下探検ツアーに行きました。そこはベルリンの壁で東側から西側に行くために作った地下の道だった。その話にはいろんなことが絡まっていて複雑でした。またベルリンの歴史を知ることができて良かったです。特に立ち入り禁止の地下の道に入らせてもらったのがいい体験だと思いました。そこは狭かったけど丈夫に作られていました。

次に、メンデルスゾーンが眠る共同墓地に行きました。そこにはメンデルスゾーンの生涯や、メンデルスゾーンの家系などが書いてある小さな記念館がありました。私はメンデルスゾーンを知らなかったので、また新しい勉強になりました。お墓を見てみると、埋葬されていて横に並んでいました。

次は、遅めの昼ご飯を食べに行きました。ですが、行く予定だったサンドイッチ屋がその日の朝に放火されていて、そんなことってあるんだなーと思いました。カレー味のソーセージを食べに行きました。安いのに量が多かったことにびっくりしました。とてもおいしかったです。そのあと、ホテルに戻る時タピオカを飲みに行こうと言われて 6 人で行きました。ドイツもタピオカが人気なんだーということも知りました。タピオカの店に行く途中「ユニクロ」や「無印良品」があって親しみやすかったです。タピオカ代はサラがプレゼントだからとおごってくれました。タピオカは日本よりもおいしく感じました。

ホテルに行って荷物を持った後、バスに乗りました。バスには犬や自転車を乗せていました。斜め前の犬がお利口でかわいかったです。降りると、駅にいってそれから簡単に自己紹介しながら 30 分揺られました。結構ユースホステルからは遠かったです。家に着くとサラのお母さんが出迎えてくれました。英語が苦手なのに頑張って話しかけてくれました。私もわかる単語で応答をしました。すごくありがたかったです。お菓子を食べたり、部屋を紹介してくれたりしてくれました。そして、日本茶を入れてくれたりしました。部屋は広くて、ほかの部屋も全体的に広かったです。夜ご飯はフレンチトーストでした。ドイツではフレンチトーストをお金がないときによく食べると言っていました。日本ではあまりたべないし、朝に食べるので夜に食べるのが新鮮でした。そのあとは、お風呂に入りました。シャワーだけなのでやっぱりお湯につかりたいなーって思いました。お風呂から出た後リビングに行くと、サラのお母さんが自分の国について話してくれました。あまり知らなかったので興味深かったです。

サラが来ておやすみといったので部屋に戻り、疲れていたのですぐに寝ました。

3 日目は、6 時ぐらいに起きて顔を洗ったり、髪の毛を直したりしました。8 時になると、サラのお母さんが「仕事に行ってくる」と私に言ってから行きました。9 時ぐらいになるとサラが朝ごはんの用意をしてくれました。ドイツ人の朝ごはんは普通サンドイッチでよくチーズを挟むようです。食べた後、食器を片付け、家を出る用意をしました。10 時頃、家を出て駅に向かいました。電車に乗っていると、警察の人が来てチケットがあるか確認をしていました。そしたら、サラが持ってきていなくて警察の人が次の駅で降りろと言ったので降りたら結構怒られていいました。日本ではそんなことがないので怖かったです。そしたら、罰金の紙をもらって駅からサラのお母さんの仕事場まで歩きました。でも、駅降りてから何も言わず歩かされていたので不満に思いました。

サラのお母さんの仕事場に行くと、サラがお金をもらって傘などももらってからニッケとかりんちゃんと合流するために 2 日目に行ったタピオカの店に行きました。また、タピオカを飲んでいたら、ソフィアとその友達と樹香ちゃんが来てスタバに行きました。ソフィアと友達とこのかちゃんが飲んだ後にソフィアと友達が休みの日に行っている場所に連れていってくれました。そこは、韓国のアイドルが好きな人が集まってサビの部分をランダムに踊るというものでした。最初は見ていただけだったけど、楽しそうにしていたので、知っている曲は踊るようにしました。前で踊っていた人が手でグットとやってくれたので、それがうれしかったです。それを 2 時間くらいしているとサラとニッケが買い物から帰ってきたのでダンスを終えて用意をしているとソフィアが「ダンス上手ですね」って言われて一番うれしかったです。

その後にベルリンのお店にいってカレーケチャップの飴とさくらんぼの酒のケーキの飴を買いました。あまりドイツの人は買わないらしいです。その後に、高級化粧品のビルに行きました。日本にはない化粧品があってすごかったです。他にも甘いパンなどをソフィアに教えてもらいました。そのあと、ニッケとかりんちゃんとバイバイをしてからソフィアの友達と会いました。5 人で服を身に行ってからソフィアの友達と分かれてアイスを食べに行きました。アイスは日本とは違った味でも美味しかったです。その後にソフィアが彼氏とあってから私とサラが帰りました。帰った後疲れていたのでシャワーを浴びてから 9 時に寝ました。

4 日目は、6 時に起きて顔を洗ったり、髪の毛を直したりして 1 時間過ごしました。朝ご飯にプレッシェルを食べてから用意をして 9 時に家を出ました。

ワークショップの会場についたとき建物の形が独特ですごかったです。ワークショップの最初は「日本人の特徴」と「ドイツ人の特徴」についてパントマイムで表現するというものでした。意外と何気にしていることが日本人の特徴として捉えられていたということがびっくりしました。次に、音楽を聞いてからその音楽に合わせて顔や身体で表現しました。これが一番難しくて慣れるのが大変でした。あと、人それぞれ思っていることが違うし、それを表現するのが違って面白かったです。色々なれないことばかりだったけど、楽しめてできたのでうれしかったです。でも、ドイツ人の子たちが飽きてきて意見は言うけど行動は全然ダメでほかの子としゃべったりしているのが不思議でした。

ワークショップ 1 日目は楽しかったけど、難しかったという全体の感想でした。ワークショップが終わるとマクドナルドに行こうと言われてついていきました。私が食べたのはチキンナゲットでした。美味しかったけど、食べている最中に下品な言葉を言うのは辞めて欲しかったです。私はその時が一番恥ずかしかったと思いました。帰りに日本食などが置いてあるスーパーに行きました。久しぶりに日本食が見られてうれしかったです。家に帰ったらシャワー浴びて 9 時頃に寝ました。

5 日目は 6 時に起きていつも通り用意をした後 9 時頃に家を出て行きました。

電車に乗ってワークショップの場所に行きました。2 日目のワークショップは人物の名前や場所の名

前などを使ってするゲームや、音楽を聞いてその間に思ったことを書くというものは最後の方になんて書こうかと考えて思考停止してしまうので難しかったです。日本人がリードするゲームでは日本人は自分たちのことしか考えてなかったので相手のことを思いやらないといけないと思いました。最後は発表をする内容を考えたり、練習をしたりしました。ワークショップ 2 日目はドイツの子たちが飽きていてやる気がなさそうに思えました。1 日目よりひどかったのでしんどかったです。でも、発表会が成功して良かったと思いました。ベルリンフィルハーモニーは初めてオーケストラの真後ろで聞けて感動しました。曲の始まりが聞こえた途端に肌が立ちました。私はあまりオーケストラを聞かないのですごかったとしか言えなくてショックでした。初めての体験だったので貴重だと思いました。

夜は色々あってソフィアの家に泊めてもらいました。夜遅くにやさしく迎えてくださったのでうれしくなりました。お風呂に入らしてもらったあとに寝させてもらいました。

6 日目はソフィアのお母さんとお父さんが朝もベットまで来て起こしてくれたり、おもてなしの心がすごかったです。重たいキャリーケースを持ってくれたりしてくれました。ほんとに有り難かったです。市内観光ではポツダムに行ってきました。室内が高級感で埋め尽くされていました。建物も歴史を感じることができました。買い物をしにドラックストアにいって部活のお土産などを買っていると、店員から「Are you Chinese」といわれてしまったので恥ずかしかったです。光の祭典はきれいで、迫力がありました。でも、帰る途中にぼったくりドナルド・ダックに出くわしたのは怖かったです。

ドイツ 1 週間の感想は、楽しいときもあったけど、しんどかったときや悲しいかったときもあってつらかったです。でも、いい体験ができたと思います。この 1 週間で学習したことはたくさんあるので、少しずつ今後の生活に反映させていきたいと思いました。そして、日本が安全すぎる国でそんな国で生きてこられてすごく幸せだと思うし、母国愛が強くなりました。

ドイツ研修　研修報告レポート

１年４組　藤岡 瑞葵

私は、10 月 6 日から 10 月 13 日まで日独交流プログラムに参加しました。言語も違うく文化も違う異国の地で一週間すごすのは少し心配でしたが、楽しく充実した時間を過ごすことができました。

【10 月 6 日】

初日は朝５時１５分に駅に集合でしたが楽しみの気持ちが強く、集合時間の２０分前についてしまいました。その後リムジンバスに乗車するとき家族に「気を付けてね。いつでも連絡しておいで。」と優しい言葉をかけられ少し寂しい気持ちになったのと、家族の大切さを感じました。

そして７時ぐらいに関西空港に着き、旅行会社の方から搭乗チケットをもらいました。荷物を預ける受付で重量オーバーになってないか心配しながら受付を済ませました。液体は荷物検査に通せないのでごみ箱に捨て、人生初の金属探知機の中を通りました。税関の人たちの目つきが少し怖かったです。ゲートを過ぎると沢山の免税店やブランドショップがありました。そこで関西空港の広さを実感しました。いよいよ飛行機に乗るときに日本を旅立つ実感が凄くわきました。

飛行機に乗るとファーストクラスとエコノミークラスの違いに驚きました。これから１１時間もの時間飛行機に乗っておくのは少し苦痛なんじゃないかと乗る前に思っていましたが、座席についているテレビの充実さや背もたれが結構倒れるので全然苦痛じゃなかったです。機内食がすごくおいしく、おかわりが無いのが残念でした。機内の電気が消え就寝時間になっても楽しみな気持ちで寝れず、ずっと映画を見ていました。

そして１１時間の旅が終わり乗り換えの前に入国審査がありました。英語で質問された内容がなかなか理解できず手こずりましたが何とか入国できました。乗り換えた飛行機でミュンヘンからベルリンまで行きました。着陸するときすごく耳が痛くなり辛かったです。

飛行機を降りたら WILDE 先生と合流しホテルに行きました。ホテルは名前に「サーカス」と付いているのでホテル内がサーカス仕様ですごくかわいかったです。先生の部屋にはシルクハットまでおいてあり、私の好みのコンセプトのホテルでした。みんな長旅で疲れていたのでご飯を食べお風呂に入るとすぐに寝ました。

【10 月 7 日】

朝は 7 時に起きました。この日はドイツ側の生徒さんたちと会う日ですごくワクワクしていました。ホテルの朝ごはんはビュッフェ形式ですごく色々な食べ物がありました。もちろんお米はなくパンが多く置いてあり、種類も豊富でした。私が一番おいしいと思ったのはハムです。ハムだけでも 3 種類ぐらいあり、どれもおいしかったです。

朝ご飯を食べ終わったら持ち運ぶ荷物以外の荷物を預けて、ドイツの生徒さんたちを待っていました。私のペアの子は一番初めに来て、事前に顔はわかっていたのですぐにわかりました。自己紹介をした後に初めて言われたことは「身長がすごく高いですね。」と言われました。私は英語をあまり話せないので、話せないなりに単語をつなげて喋ることを心がけていました。でも意外と通じて会話が成立できてよかったです。

この後市内研修に行きました。ベルリンの壁を超えるための地下トンネルツアーやメンデルスゾーンの墓地へ行ったりしました。昼食は屋台で食べました。行くはずだった屋台がその日の朝に火事に

なり、急遽ドイツといえばのソーセージ料理を食べました。ケチャップの量がすごく多くポテトの量も多かったです。食べ終わった後に少し胸焼けがするほどでしたが、すごくおいしかったです。

ホテルに戻ると、ホストファミリーの方々が来られていました。私のホストファミリーの人たちはすごく優しく、まだ自己紹介もしてないのに出会ってすぐ名前を呼ばれ少し驚きました。笑顔で迎えてくださり、緊張が一気になくなりました。私の家だけすごく離れたところだったので日本の仲間と別れるのは少し寂しかったけれど、先生方が「頑張ってね！」と言ってくださったので寂しさは無くなりました。電車で移動しているときは、重たいキャリーケースをお父さんがずっと持ってくださり私は THANK YOU と言うしかありませんでした。お母さんも気さくにしゃべりかけてくださり、嬉しかったです。家に着くとお姉さんが迎えてくださりました。部屋に案内されるとプレゼントがありすごく嬉しかったです。その日の夕食は、ジャガイモの茹でたものと、ハムやチーズと一緒に食べる料理でした。食べ方を丁寧に教えてもらいました。食べ終わったらお風呂に入り、お風呂から上がると「おやすみ！」と言われたので部屋に入って時計を見るとまだ９時前で、ドイツの就寝時間は早いんだなと知りました。

【10 月 8 日】

この日は一日、自由の日で、ペアの子とベルリン市街に出て買い物をしました。ドイツにはグミ専門店があり、すごくカラフルで可愛いグミが沢山売ってあり、クラスのみんなのお土産をそのグミにしました。そのあとはドイツの服屋さんに行きました。中には、漢字で「桜」とプリントされたものもありました。その日の歩数を見てみると５万歩になっていました。

雨が降っていたので早めに帰り家でテレビゲームをしました。最新のゲーム機器がありマリオカートをしました。ペアの子と大声を出しながらはしゃいでいました。その後、ワークショップの迎えに行くための車を取りに行った後、ドイツの IKEA に行きました。そこで夜ご飯を食べて日用雑貨を買いました。お母さんが便のボトルを爆買いしていて面白かったです。

【10 月 9 日】

この日は参加メンバー全員で共同ワークショップをベルリンフィル・コンサートホールでしました。ワークショップの初めにはリズムに合わせて日本語とドイツ語の両方で自己紹介しました。そのあとは、基本言葉を使わず体の表現だけで伝えたいことを伝えるということをしました。私が一番面白かったのは、ロベルトシューマンが旅に出るためにするパッキングを基本としたゲームです。自分が荷物として入れたいものプラスまえのひとが荷詰めしたものを覚えてジェスチャーで表すゲームです。このワークショップでペアの子以外のドイツの生徒と喋ることができたので楽しかったです。昼食は持ち寄りビュッフェでいろいろな家庭の料理を見ることができました。全部おいしそうで、日本でもまねして食べてみようと思いました。

この日、隣の町で銃乱射事件が起こり少し怖がりながら家に帰りました。そして寝ようと思ってベッドに入った数分後に銃声が聞こえたのですごく怖かったです。でも、音が小さかったので距離は離れていたと思います。怖かったので日本の家族に電話をしました。久しぶりに聞くお父さんとお母さんの声で少し泣いてしまいました。その後すぐに寝ました。

【10 月 10 日】

この日も別の場所でワークショップをしました。この日はロベルトシューマンが作曲した「ライン」という曲をもとにしました。曲が流れているあいだ、思いついた単語を紙に書くということが一番印象に残っています。曲調がよく展開されていくので、思いつく単語はぽんぽん出てきます。

一日ワークショップをしたら、私が一番楽しみにしていたベルリンフィルハーモニー管弦楽団の演奏を聴きました。迫力満点でその素晴らしさに言葉が出ませんでした。この演奏会にはたくさんの方

が来られており、とくに年配の方が多かったです。演奏会が終わりホストファミリーが迎えに来てくれていて「疲れた？帰ったらすぐ寝ていいよ！」と優しい言葉をかけてくれました。

【10 月 11 日】

この日の朝ごはんはお別れセレモニーでした。四日間お世話になったホストファミリーとお別れするのは寂しかったけど笑顔でお別れできてよかったです。

朝食を終えた後、市外研修に行きました。ポツダム宣言が採択された「ツェツィーリエンホーフ宮殿」は、入ってすぐの芝生のところに大きな星のマークがありました。ショッピングで一番印象に残っているお店は、「アンペルマンショップ」です。アンペルマンとは、ドイツの信号のキャラクターのことです。凄くかわいいグッヅがたくさん売ってありました。友達や家族へのお土産はほぼほぼそこで買いました。私自身にもそこで買いました。その店がある同じ通りにマシュマロ専門店がありました。形がいろいろあって、雪だるまやワニ、ネズミといったたくさんの種類がありました。さらにジェラート屋さんがあり私は木苺のジェラートを食べました。甘酸っぱくてすごくおいしかったです。

その日の夜ご飯は、ホテルの近くのお総菜屋さんで沢山料理を買って、ホテルの部屋でパーティーをしました。私が一番おいしかったのは、カマンベールチーズです。友達に「おいしいから食べてみて」と言って食べさしたら、「おいしくない」といわれました。食べた後に「チーズに上の白いやつ、白カビやで」と言ったらすごく険しい顔で私をにらんできました。それもいい思い出です。

【10 月 12 日】

朝はすごく早起きして空港へ行きました。今日でドイツを出ると思うとこの数日の思い出が次々にフラッシュバックしてきました。ここからまた長い飛行機の旅が始まりました。でも帰りは眠たかったので寝ていました。なので少し早く感じました。数日ぶりに加古川駅に戻ってきたら、家族はもちろん、教頭先生と水谷先生が来てくださっていました。そこで皆さんの顔を見た瞬間、母国に帰ってきたんだなと実感しました。

本当の家に帰ったら、ホっとしました。久しぶりにペットに会えたし、友達からも LINE で「おかえり！」と連絡がきて嬉しかったです。帰ってきてご飯を食べたとき日本の料理、本当のお母さんの料理がこんなにおいしいと感じたことはないくらい美味しかったです。

まとめ

日独交流プログラムで学んだことは、自分の感情や伝えたいことはしっかり表すということを学びました。自分の感情を表に出さないと周りには伝わらないということです。でも、出していい感情とダメな感情があることも同時に学びました。さらに、ドイツのみんなと過ごしていくうちに、異文化を学ぶことでお互いをリスペクトできる関係にまでなってよかったです。日本の家族と離ればなれの状態は少し寂しかったけれど、ホストファミリーと仲良くなれてすごくよかったです。言語が通じなくても、伝えようとしたら伝わったので達成感が凄くありました。このプログラムに参加して本当に良かったです。

ドイツに行って

1年1組　田村 果鈴

1日目

飛行機に乗る前、本当にドイツで8日間も過ごせるのか、ワクワクしていた半面、すごく不安でした。空港について、自分が今からドイツに行くという実感がわかず不思議な気持ちでした。飛行機に乗る前にたくさん日本のお菓子を買いました。飛行機の中では、すごく退屈でした。飛行機が自分の知っている国の上を通った時、メンバーとすごく盛り上がりました。

ドイツに着いて、背の高い人、鼻が高い人、目が青い人、髪の毛が茶色の人が自分の目の前を歩いて行ってびっくりしました。入国審査の時、質問に答えてもなかなか伝わらずすごく焦りました。外はとても寒く、日本と比べると10°Cくらい違いました。バスに乗った時、運転が荒く酔いました。電車は、日本のよりも静かよかったけど、電車のチケットの仕組みがよくわからずみんなに合わせて頑張りました。

2日目

ユースホステルでの朝食はとってもおいしかったです。ちなみに私は、ヨーグルトにはちみつをかけたものと、ワッフル三枚と、プレッツェルを1枚食べました。

ホームステイ先の子と初めて会いました。第一印象は、おしゃれで優しそうだなと思いました。ベルリンを回っていたとき、ニーケちゃんはサラちゃんとばっかり話していていっぱいしゃべることができませんでした。ベルリンのタピオカを飲みました。すごくおいしかったです。

家に着いて、日本から持ってきたものをお母さんとニーケちゃんに渡すと、すごく喜んでくれたので、うれしかったです。夜ご飯はお母さんが作ってくれたのですが、あまりおいしくなかったです。ちなみにその日の夜ご飯は、玉ねぎとりんごとマカロニとキャベツを炒めたもの、ソーセージ、チーズケーキ、ミントティーでした。炒め物は、すっぱくておいしくなかったのですが、みんなおいしそうに食べていたので周りに合わせて頑張ってたべました。ソーセージは、日ごろよく食べてるものと違っていて、乾燥させているようにしわしわで、硬かったです。チーズケーキはおいしかったです。お風呂は、私は夜に入ったのですがお母さんとニーケちゃんは朝に入っていました。シャワーだけで寒かったです。ユニットバスなのでニーケちゃんがお風呂に入ってる間はトイレに行けなくて困りました。

3日目

10時くらいに起きました。朝起きるとお母さんは仕事に行っていました。朝ごはんは、ナッツが入っている薄いパンを二枚、イチゴのヨーグルトを食べました。パンにはチョコレートをぬって食べました。日本では見たことないパンで、味も癖がありました。ニーケがお風呂に入っている間に身支度を済ませ、待っていました。

いろんなところに遊びに行きました。一番初めに行ったところは、チョコレート屋さんです。私は、そこでチョコブラウニーを食べました。おいしいのですが、気持ち悪くなりました。そのあと、鶴山さんと岡田さんと合流してタピオカを飲みに行きました。そのあと、ショッピングモールに行って、Kポップのダンスをみんなで踊りました。日本では見かけない光景なので新鮮でした。それからは、お土産を買って家に帰りました。

この日は、私が調理しました。(そうめん、焼きそば、ラーメンなど)2 日ぶりの日本食がすごくおいしかったです。お母さんとニーケちゃんと友達においしいと言われたので嬉しかったです。夜に郵便局にいきました。スーパーのレジみたいに並んでいました。

4 日目

4 日目は朝早くて少ししんどかったです。ニーケちゃんは時間にルーズなので全然時間通りにつきませんでした。ワークショップでは、すごい長い時間みんなと体を動かしました。楽しかったけどそんなに長くして意味があるかと疑問に思いました。ドイツ人の日本のイメージが当たっていて、日本人は真面目だと改めて感じました。ニーケのお父さんが作ってくれたお昼ごはんのチャーハンがおいしかったです。休憩時間で日本のメンバーともより仲良くなれたので良かったです。帰りに、ドイツのマクドナルドに行きました。日本と全然違うのでびっくりしました。私は、バンズの形が細長いやつを食べました。たべごたえがありました。おいしかったです。その日は疲れていたのでお風呂に入った後すぐに寝ました。

5 日目

朝が早くて起きるのが大変でした。この日は、4 日目と比べて時間通りに行けたので良かったです。ワークショップでは、急に「あと 1 分で考えて」と言われたりしたので、もうちょっとゆっくりしたいなと思いました。見えにくいという指摘をもらったので見えるように意識もしないといけないし、自分たちで曲に合わせて考えて動くことがすごく難しかったです。お昼ごはんのバイキングがおいしかったし、たくさん話せて楽しかったです。家族の人たちに見てもらったとき、笑顔で、優しい目で見てくださったのでほっとしました。

私の本命のベルリンフィルハーモニーでは、さすがプロだなとおもいました。トランペットは、普段聞いている音と全然違っていて、ホルンは三本もあるのに一本の音に聞こえました。ちょっとくらいずれるかなと思っていたけど、ぜんぜんずれないし、すごいなと思いました。自分もやる気が出ました。ヴァイオリンのソロの人が弾いているとき、周りの人は上手に目立つように吹いていてすごかったです。ティンパニーの人がずっと音程合わせていたので、そんなにあわせなあかんのかなと思いました。勉強になりました。終わった後、不安なことがありましたが、無事に帰れて良かったです。しっかり謝ってもらいました。

6 日目

家を出発して、ニーケちゃんの住んでいるマンションのお庭を案内してくれました。広いし、動物もいて楽しかったです。朝食をみんなで食べたのですが、ドイツのメンバーとは喋れませんでした。プレゼントを渡すとき、ニーケちゃんが泣いていたので、もらい泣きしてしまいました。最後にみんなでいろいろなところに行けてうれしかったです。ユースホステルでは、みんなで楽しく食事をしました。おいしかったし、たくさんお話しすることができて嬉しかったです。

今回、ドイツに行って言葉が通じなくても、いろいろな手段をつかうことで心は通じることを学ぶことができました。行っていなかったら体験できない素晴らしものもあったので、今後の学校生活に生かしていきたいです。

課題

1　理解できたこと

初めは、「ドイツ語喋られんのどーしよ。」とか思っていたのですが、ワークショップを通して、言葉以外の手段で伝えたいことが伝わるということがわかりました。ドイツの人は、積極的で、質問や、わからないところがあればすぐに質問していました。一方、日本人は遠慮してしまって質問があ

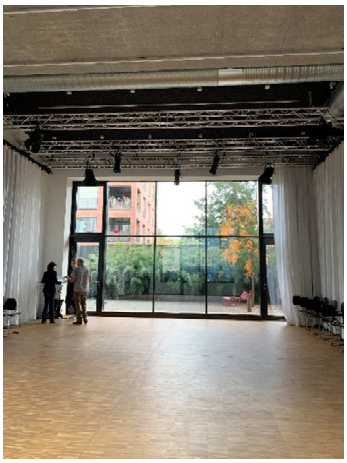
ってもしていませんでした。見習いたいと思います。

２　理解できなかったこと、疑問点

もっと時間が欲しかったです。「１分で、これ考えて」とかもあって時間が足りなくて考えれてなかったら怒られました。どうして、ワークショップの時の共通言語が英語じゃないのか気になりました。ニーケとサラがいないことをもっと早い段階でわかっとくべきだとおもいました。

３　帰国後に感じたこと、それから、自分の中に何が加わったか

やっぱり日本が一番だなと思いました。前まで外国の人と話すことに抵抗があったのですが、それがなくなりました。



日独異文化相互理解交流を終えて

校 長　原　　実男

ベルリンから帰国してはや１ヶ月になろうとしている。ドイツの高校生とのワークショップとそれに連動したベルリン・フィルハーモニー管弦楽団によるシューマン「交響曲第３番ライン」の鑑賞、ベルリンの壁や地下トンネルの見学、第２次世界対戦後の世界の統治の仕方を決定したポツダムの見学など様々なプログラムを体験することができた。記憶が散逸しないうちにボン・ボヤージュで記しておきたいと思う。なお、参加した８名の生徒の皆さんの発表は１２月２０日に報告会が予定されています。

◆１０月６日（日）

５時１５分加古川駅北口バス停留所に全員集合。関西国際空港行きリムジンバスに乗車する。「いよいよだな」緊張感と期待、だんだん目が覚めてくる。７時すぎ第１ターミナルに到着。搭乗手続きやセキュリティーチェック、出国審査も問題なくおわり搭乗ゲートに進む。

お茶などを買い込んで定刻通りルフトハンザ７４３便（満席）はミュンヘンに向かった。今から１１時間のフライトである。乗客は日独半々といったところか。CA に日本人がいたのでなぜか安心した。時差は７時間（３月３１日から１０月２７日まで独はサマータイム）。映画をみたり本を読んだり過ごすのだが６時間はあっという間だがあと５時間は長く感じた。食事は２回、間におやつやおにぎりもでてくる。久しぶりに「ビッグフィッシュ」を見れたのはよかった。エコノミー症候群にならないように座席を立って動き回る。

定刻通りミュンヘン空港に到着。ここからＥＵへの入国となる。入国審査は想像していたよりも厳重に行われていると感じた。金属探知や持ち物検査もバッグを開けるなど一人ひとり時間をかけている。靴を脱がされている人もいる。シェンゲン協定に参加する国々での国境管理は廃止されるわけだからここドイツに入国すればＥＵ内の移動は自由になる。だから入国審査は厳重にならざるを得ない。時間はかかったが無事通過して国内線に移動。ミュンヘン空港から首都ベルリンの入り口、テーゲル空港に１時間で到着した。

テーゲル空港に到着。近代的なミュンヘン空港（ＥＵのバブ空港）に比べ首都ベルリンの空港としては古くて小ぶりの印象。預けた手荷物の返却も時間がかかる。聞くところによると新空港が設計ミスとやらで開港できないらしい。（計画的で実直なドイツのイメージが…）

出口には Aya wilde 先生（以下あや先生）が笑顔で出迎えてくれました。早速ベルリン市内で使えるＢＶＧチケットを購入してもらいました。これは７日間ベルリン市内の地下鉄やトラム（路面電車）、バスなど交通機関が乗り放題になるリーズナブルなチケット（約 4,500 円）。２台で連結された黄色いバスに乗車。「ささっと乗りましょう。日本のように運転は優しくないので注意しましょう」とあや先生。ドイツにいよいよ来たんだな。緊張感が高まってきた。

多くのＥＵ諸国では切符の改札はない。しかし、切符をちゃんと買っているか、不正乗車していない

か調べる検札官が私服で乗車していて目を光らせている。そういう事もあって早速購入した７日間チケットを検札器に通しチケットに印字しておく。切符に印字することが改札を通過したことになる。（実はこれが後でトラブルになる原因となる）

３０分程度でベルリン市に到着。パリやロンドンのような華やかさはなく実直そのものの町並みである。ベルリン中央駅でトラムに乗り換え初日に宿泊する Circus Gbr に到着、チェックイン。中心街にも近く、ホテルの目の前がトラムと地下鉄駅という好立地。規模は小さいがリーズナブルな価格で若者を中心に稼働率はよい。また、ルームキーは電子カードでエレベーターの乗車や各階のゲートもカードをかざす必要がありセキュリティーもしっかりしていると感じた。また、清潔感もあり WiFi 環境もよい。朝食のバイキングもワタシ的には十分満足できた。加古川駅集合からチェックインまでほぼ２３時間、初日が終了した。

◆１０ 月７日（月）

ホテルからベルリンの壁に向かって地下鉄で移動する。ここで例の検札官にいきなり遭遇。ＢＶＧチケットの印字が悪くてあわやドイツの生徒に罰金（最低でも７千円）が科せられそうになったが印字する方向のミスということで厳重注意で済んだ。

訂正

地下鉄での切符のトラブルは日本側生徒でおこったことです。不正乗車ではないのですが印字する機械に通す方向が逆になっていました。あや先生が機転を利かせて検札官に説明して事なきを得ました。

海外で生きていくということはこのようなトラブルに対処していくことです。語学力はあったに越したことはありませんがなくても自分自身で乗り越えて行かなければなりません。「主体的に生きる」ということの厳しさと面白さを実感した瞬間でした。

さて、今年は壁が崩壊してちょうど 30 年、新聞やテレビでも特集がされている。写真の背後にあるような壁やモニュメントが保存・整備されている。第二次世界大戦後、世界は資本主義自由主義陣営（西側）と社会主義共産主義陣営（東側）に分かれた。敗戦国ドイツのベルリンの街も分割され、1961 年に人が自由に行き来できないように壁が築かれたのだ。それはある日突然起こった。いきなり家族が引き裂かれた人も多数出たのだ。離れ離れになった家族を西側に連れ出そうと壁の地下にトンネルが掘られたのだ。この地下トンネルの見学に向かう。

ベルリンの壁を保存しているほど近く、地下トンネルが保存されている。地下トンネルとは東ドイツ側の家族を西ドイツ側に連れ出す地下トンネルである。政治体制によって引き裂かれた家族や知人を救うために壁の地下に秘密トンネルが多数掘られ、現在も保存されている。トンネルの発掘及び保存に尽力されているアーノルトさんの先導のもと日独の高校生は地下に潜った。また、通訳をベルリン在住のジャーナリスト中村真人さんにお願いした。このときの模様はネットで読むことができます。「逃亡トンネル　中村真人」でググってみてください。

地下トンネルの説明をするアーノルトさん（右端）

いよいよ本当に使われたトンネルの入り口を覗く機会を得た。崩れないように三角形の木片を組んだトンネルが暗闇に続いていた。三角形の一辺は 80cm ぐらいしかなく息が詰まりそうだ。もし実際潜ったら閉所恐怖症になりそうで戦慄が走った。これを数百メートルも掘り続けたとは。愛する家族、恋人を連れ戻す一心で人はここまでやるんだ。壁の下の土壌は乾いた砂地で掘りやすい。しかし東ドイツ側には銃を持ったシュタージ（秘密警察）が聞き耳を立てて監視しているのだ。失敗すれば死。これはサスペンス映画ではない。史実である。

地上に出てすこしお腹も空いてきた。クロイツベルク地区に移動する。この地区は旧西側の東端に位置し、学生やアーティストも多い地区。かつてはトルコ人の移民街でもあったのでエスニックな雰囲気もあるところ。お目当てのサンドイッチ屋さんは閉店中。どうやら失火が原因のようだ。その隣にポテトとソーセージに香辛料の粉とたっぷりケチャップのかかったファーストフードで昼食（多分カレー・ヴルストという料理）をとった。

お腹も膨らんで次にメンデルスゾーンが眠る共同墓地に移動する。今度のドイツ側生徒の学校名はフェーリクス・メンデルスゾーン・バルトルディ・ギムナジウム。フェーリクス・メンデルスゾーン・バルトルディは作曲家メンデルスゾーンの正式な名前である。２日後から始まる異文化理解を目的にした協働ワークショップの素材に作曲家シューマンを扱う。シューマンとメンデルスゾーンは同時代に活躍し互いに影響を受けた関係である。共同墓地の一角にはメンデルスゾーン家専用のチャペル兼博物館があり、一族の詳しい説明がされている。家系図や後代に影響を与えた展示物が並べられている。

フンボルト大学前で（ベーベル広場）

あや先生の解説のあと墓地を見学し、ベーベル広場を巡ってホテルにもどった。ベーベル広場には国立歌劇場など壮麗かつ優美な建築がパノラマのように展開する。また、この広場はナチスが２万冊の本を焼き尽くした現場（ナチスドイツの焚書事件）でもある。ホテルでホームステイ先の保護者と対面し各人ドイツの家庭に出発した。翌日は各ホームステイ先で過ごすことになる。

◆１０月８日（火）

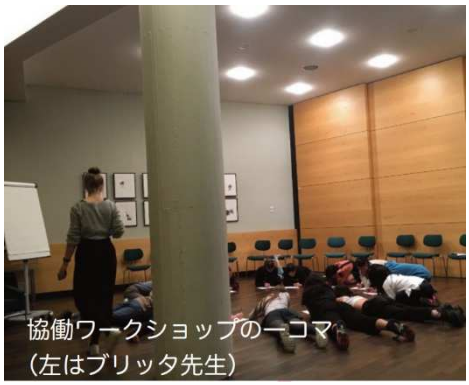
８人の生徒はそれぞれのホストファミリーで生活。この期間はベルリンの高校は秋休みということで学校はありません。引率の私たちは博物館や美術館を巡り歴史や文化に関する研修をおこないました。

◆１０月９日（水）

【協働ワークショップ１ 日目】

本日から２日間に渡って日独生徒１６人が参加するワークショップが始まる。

ワークショップの場所はベルリン・フィルハーモニー管弦楽団（BF）の本拠地であるコンサートホールという普通ではありえない設定である。ワークショップで使用する打楽器などをあや先生と藤居先生とともに楽器庫からお借りする。ワークショップはコンサートホールのゲストルームをお借りした。


協働ワークショップの一コマ
（左はブリッタ先生）

BF 側の格別の扱いはあや先生との太いコネクションの賜である。ワークショップの指導はあや先生とブリッタ・シューネマン先生。お二人はともに「音楽演劇教育」を同じ大学の指導者で学ばれた関係である。

さて、ホームステイ先から現地集合だったのだが道に迷った生徒がいたため 25 分遅れのスタートとなった。まず、ブリッタ先生から本日の目的など以下に示す説明があった。「ワークショップでは、私達２名は教師ではない。教師と生徒という上下関係はないということです。明日フィルハーモニーで「ライン」（シューマン作曲、交響曲第３番）を鑑賞する。今回は音楽演劇教育というメソッドでワークショップを行っていく。（みんなで円形になったまま）この教育方法（ワークショップ）は私たち２人からきっかけを与え、それによって自分の中（意識や心）で動いたものを表現する。最後はプレゼンテーションをする。基本的にドイツ語で指示するが適宜日本語に訳す。」

右からブリッタ先生、あや先生
（ベルリン・フィルハーモニー前で）

まずはアイスブレークをする。リズム（二拍子）を取りながら一人ずつ自己紹介をしていく。BF からお借りした打楽器を使ってホームステイでペアになっている日独の生徒を互いに表現してみる。ブリッタさんから切れ目なく指示がでて、ペアやブループでの作業が続く。また、シューマン作曲「ライン」がワークショップの素材となっている。楽曲だけでなくそれを創造したシューマンの生い立ち、芸術家としての努力や苦悩にふれる作業もあった。

ここに５時間におよぶワークショップのすべてを記述することはできないが、その特徴は
①身体を使う
②非言語的表現
③他者の表現を受け取る
④自己と対話して湧き上がったことを表出する
⑤思考、直感、集中力を必要とする
⑥経糸は自己理解であり異文化理解
⑦横糸は優れた芸術の力を借りてインスパイアー（自己啓発）していく手法（今回はシューマンおよび交響曲「ライン」、そしてそれを BF の演奏で鑑賞する）
と私は理解した。「自分の中で動いたものを発信するんだ」と何度もブリッタ先生、あや先生から指示が出る。午後３時半振り返りと分かち合いが行われた。

【日独生徒の初日の感想】
・最初は何が目的なのかよくわからなかったが、楽しかった。疲れた。
・目的が何なのかわからなかったので戸惑いもあったが楽しくなってきた。
・時間がダラダラ流れるような不思議な時間もあった。疑問もあった。
・日独の交流は良かった。日本語が使える機会を持てたのはよかった。（独生徒）
・言葉は通じないが通じた単語でわかり合えたこともあった。
・多くの協力があってフィルハーモニーでワークショップできた。これは大切なことである。

【原の見学した感想】
ワークショップをはじめて拝見した。時間や日数の制約の中、みんな頑張りました。

自己との対話、自分という未知なるものがどのように「響くか」面白いと感じられるか。つまり、自分で自分を評価するメタ認知能力が大変重要になってくると感じた。しかし、メタ認知能力に長けるだけでは解釈が先行して理知的な納得で終わってしまう危険性もある。今日うまく表現できなかったり、シューマンの気持ちに近づけない焦燥感（違和感）が残った生徒は実のところ不思議の種を得たのかもしれない。

ワークショップを始めて見た私としては興味が尽きない体験であった。これは相当な準備が必要で、全く再現不可能なプログラムであると感じた。だから、最初に戻って「自分の中で動いたものはなにか？」と問いを投げかけることがとても大切だと感じた。

◆１０月１０日（木）

【協働ワークショップ２日目】

２日目の場所は企業なども使用する研修施設（セミナーハウス）、通常の教室程度、中庭もあり開放感がある。

10 時ワークショップが始まった。全員で輪になって、５つの指示通りに動く［①歩行　②速歩き　③小走り　④スローな歩行（顔の動きもすべてがスローモーション）　⑤ストップ］。号令は番号で指示。素早い身のこなしを全員で行う。笑い声もあるが緊張感もある。とにかく指示通り動く。「部屋全体を使おう。角も使おう」。次にブリッタ先生から表情を追加する指示が出る。①誰もが感じられる喜び　②悲しみ　③怒り　④⑤そのままスロー、ストップ　「顔の表情をもっと出しましょう。友人同士で固まらない。バラバラになりましょう。」

一息ついて円形になる。この作業で難しかったことは何か。感じたことは何かという質問が行われる。ドイツの生徒からは「このような感情と身体表現を強化することはやったことがあるからしらける…」。ブリッタ先生「目的はそれだけなのですか？速度を変えるのは簡単です。日常でこのような体験はないから表情の表出は難しかったでしょう！３つの感情（喜び、悲しみ、怒り）をどんどん変えていくことに集中しましょう。もう一度真剣にやってみましょう！」演劇音楽教育という手法を私は初めて目のあたりにしたのだが相当な集中力が必要で、タイミングよくプログラムの意図を把握しているかの質問もあり、トライしたあとで振り返らせて気づきを促すことも組み込まれている。目の前にいる日独の生徒は刻々と変化していく。そのリアルタイムでの対応を見ていると柔軟で緻密な計画性に感心する。

次にキッチンペーパー（トレーシングペーパーのようなシャリシャリとすぐ音がなる紙）を使う。両手で丁寧に渡す必要があり、丁寧に両手で受け取る必要がある。音がしないように手渡していく。一周して「この緊張を保ちましょう。では、次の取り組みです」

「指揮者役は全員にある動作の指示を出す。ゆっくり動くこと。他は指揮者役の動きをまねる。輪から出た二人は誰が指揮者役であるか当ててください。他の人は指揮者役でない人を見てバレないように指揮者を意識する。誰でもできる動作でやりましょう」。このゲームで指揮者役を当てた生徒の弁：当たった理由は、一番はっきりした動作をしていたから

だ。

ゲームは続く。ものすごい静寂。当てるとその理由を聞く。というふうにここまでで 30 分。中身の濃いワークが続いていく。このあとオーケストレーションを体感させるプログラムが進む。オーケストラでは様々な楽器が絶妙のタイミングで曲を構成していく。楽器を演奏するわけではないがそれぞれの要素になって全体を意識する…身体を使って体験させる内容だと私は解釈した。つづいて今晩鑑賞するシューマン作曲交響曲第 3 番「ライン」の第 1 楽章の出だしを聞いてそれぞれが思い描いた印象を紙に書く。言葉ではなくイメージを書く。波形があったり、イラストのような絵で表現したり様々である。日独ペア 4 人で話し合い発表する。全員円形になって集合し、曲のイメージを発表する。初恋、失恋…、楽しさ⇔対立した感情もでてくる。その後、私は宿泊先に戻らなければならない要件ができて 1 時間半程度見学できなかった。

戻ってみると、日独混合のグループによるプレゼンテーションの準備中であった。テーマは異文化交流について表現する事になったようである。しかしプレゼンテーションの枠組みについて皆で意見を出してほしいと指示が出る。こういうことをプレゼンテーションしなさいではなく、この 2 日間の体験をプレゼンテーションしなさいという自由度の高い指示であった。何かわからない渦というかエネルギーが沸き立ったように感じた。一方で指示待ち人間では途方に暮れる状況でもある。日独の文化の思い込みや違いがプレゼンされ夕方にはドイツ側の保護者も到着し本番のプレゼンが披露されワークショップは終えた。

コンサートホールに向かう途中サンドイッチなどで夕食を済ませ、昨日ワークショップを行ったベルリン・フィルハーモニーに到着。続々と観客が集まって来ている。あや先生のはからいで我々はポディウム席（写真）というユニークな席でチケットを取ってもらいました。演奏者と同じフロアにいるという臨場感が半端ない。まず、タピオラの出だしだ！弦楽器の湧き上がる音。様々な色に染め上げられた絹糸が噴水のように空間に湧き上がるような感覚。指揮者の繊細な指示で織り上げられるタペストリーのようだ。素晴らしく繊細で力強く柔らかい。心地よいが挑戦するようでもある。指揮者ヤルヴィ氏が真正面にいて各パートにどんどん指示が出ている。視線と共に！ソリストヤンセン氏のバイオリンの弦の一部が切れ、上体が波打つとともにその弦が照明の中で輝く！休憩の後いよいよシューマンのラインである。ドイツの母なる大河。雄大な出だしにただただ感動する。さまざまなパートから光の粒のような音が混じり合う。ワークショップではシューマンの希望や苦悩に触れてきた。偉大な作曲家のインスピレーションを日独の生徒とともにフルに味わった夜であった。

当日のプログラム

【指揮】

パーヴォ・ヤルヴィ

【ヴァイオリン】

ジャニー ヌ・ヤンセン（ソリスト）

【プログラム】

①シベリウス

交響詩「タピオラ」

②チャイコフスキー

ヴァイオリン協奏曲ニ長調

③シューマン

交響曲第 3 番ホ長調「ライン」

私たちの席はティンパニの背後（ボールペン先あたり）
（写真は Berliner Philharmoniker Saison 2019/2020 より）

ここでワークショップを構成・指導した Aya Wilde 先生からメールが届きましたのでここに掲載します。

協働ワークショップ日独異文化相互理解交流での様子を原校長先生が５回に分けて皆さんに伝えてくださいました。この度のプロジェクトに参加された皆さんは、その思い出と共にご自身の体験を一つ一つ回想されたと思います。その他の皆さんはどの様な印象を受けられましたか？ベルリンの街の雰囲気は皆さんの知識を元に想像がついたかもしれませんが、音楽演劇教育協働ワークショップについては「なんだかワカラナイ。イメージするのが難しい」と感じられたかもしれません。実際、この教育法はご自身で体験されなければ理解するのはなかなか困難です。

音楽演劇教育は近年のドイツでは主に歌劇場教育部が後世に文化や伝統を伝える事を第一目的として行っている教育方法です。そこでは、単純に芸術作品について説明をするのではなく、その優れた芸術作品の中に散りばめられている普遍的な要素を媒体として、人間の感性と個々の気づきに働き掛ける体験型ワークショップを通して、優れた芸術作品の伝達を行います。

ワークショップリーダーは自身の創造性と演出方法を元にワークショップ全体を立体的に構成して行きます。この『旅の途中』では、一体何の為にこの課題に取り組むのだろう？と感じられた参加者もいらっしゃったと思います。直ぐには先が見えず、モヤモヤした気持ちになったかもしれません。

この教育法で大切にしている点は人間が中心であること。ワークショップリーダーは、参加者の内なる体験を細やかに想像しながら、意味のある内容を準備しなければなりません。ワークショップが始まり、リーダーたちの予想とは大きく異なる流れになった場合には、その全ての事象には理由があるので、『旅の目的』からブレない流れの中で、目の前の状況に柔軟に対応して行かなければなりません。『リーダーの旅』も決して穏やかではありません。人間同士が響き合う旅は真剣そのものです。

私たちには個性があります。参加者一人一人の意志と個性を互いに尊重し、皆で一つのチームとして響き合う事。それを目標に、この度は、ロベルト・シューマン作曲の交響曲第３番ラインを媒体とした協働ワークショップを行いました。シューマンの生い立ちや進路決定へ向けての気持ち、家族に対する悩みや葛藤、随分と後に交響曲第３番が作曲された頃のシューマン一家の様子、ライン川とその景色を表現したとされているメロディ等を題材に、日独合同１６人でいくつもの課題に取り組んだ、非常に濃い二日間でした。日本から参加された皆さんには『初めてのことづくし』で戸惑う場面が多くあったかと思います。その上、遠く離れた異国の地ですから、心身共に沢山のエネルギーを要した事と思います。協働ワークショップでは、異文化合同で構成されたチームならではの困難さや、通じ合えた瞬間に湧き上がる喜びを噛みしめる等、その他にも大変興味深い体験が沢山ありました。主体的な姿勢で意見を述べ、どんどん行動するドイツ側の高校生と、協調性を重んじ調和を大切にしながら行動する日本側の高校生、そのどちらの姿勢からも互いに学べる事が多くあったと私は思います。

海外に出てみると、日本では当たり前にそこに在るものがそこに存在しないのが当たり前な状況の中で『さて、どうする？』という自分に向けられた問が日常的について回ります。頭も心も常にフル活用。言語や表情等といった限られた道具と、これまでとは異なる環境という枠組の中での生活は、自分の内側にある知識・経験・記憶などに目を向けて、そこでの対応の仕方を考え出す事が

必要になります。
　優れた芸術作品を媒体にした協働ワークショップでは、その状態に良く似た環境を作り出し、自分発見を試みました。面白いのは『困ったぞ！』なはずの場面から、自分でも想像していなかった独自の表現が生まれてくること。そうすると、自身の内面の開放感や発想の自由度が増して行き、表現する事が少しずつ楽しくなって行きます。本来自分の中に備わっている創造力・生きる力を存分に発揮するチャンス。最初は『本当にこれで良いのかな？』と少し不安になったりもしますが、そもそも音楽演劇教育法の目指すところは、個々の表現力や表現される物に甲乙をつける事ではありません。あなた自身があなた自身でいること。そして創造性豊かに『生きる力』を身につけ発達を続けること。それらを目的として自分自身と対話をし、その上で、他者の表現や異文化相互理解に興味を持ち、協働をし、帰国後もこの体験で得た視野をそれぞれが持ち続け熟成し続けられる事を願い、優れた芸術を媒体とした日独異文化相互理解交流プロジェクトを行いました。
　私と共にワークショップリーダーを務めてくださったブリッタ先生は「日本の生徒たちは規律正しくて熱心で、物事に対しての『ありがとう』の姿勢がとても美しい」と感想を述べられました。この言葉を通して、私自身も日本人の心と国民性を再認識致しました。
　加古川南高校とフェーリクス・メンデルスゾーン・バルトルディ・ギムナジウムの交流が末長く続きますように。このご縁が私たちの想像を遥かに超えた実りある発展に繋がりますように。その歴史の第一歩を踏み出してくださった参加者の皆さん、本当にありがとうございました。このプロジェクトに込められた想いを信頼し、実現へと舵を取ってくださった原校長先生、藤岡教頭先生、藤居先生、ご協力くださった関係者の皆様方に心から御礼申し上げます。

　Aya Wilde 先生はワークショップの企画・指導だけでなく交流事業一切の調整や手配にご尽力していただきました。ここに感謝とお礼を申し上げます。

◆１０月１１日（金）

　昨晩のベルリン・フィルコンサートのあとホームステイ関連でアクシデントがあり、当初予定していたザクセンハウゼン強制収容所訪問は中止とした。ザクセンハウゼンはベルリンから電車で４０分程度。ここに政治犯やユダヤ人などが強制収容されナチスによって多くの尊い命が奪われた。是非訪れたい場所であったがポツダム訪問のみとした。
　朝８時半お別れセレモニーをユースホステルでおこなった。ドイツ側生徒、ホストファミリー保護者が集まり別れを惜しんだ。

　１０時過ぎポツダムに向けて出発。ベルリンから３０分程度の距離にある。ポツダムとは第２次世界大戦の戦後処理についてアメリカ、ソ連、イギリス３国が話し合った場所である。ポツダム宣言を日本は受諾し第２次世界対戦は終結した。トルーマン、チャーチル、スターリンが交渉した部屋や調度品が大切に保管されており、歴史の重みを実感することができた。日本語による音声ガイドサービスが充実していたので理解の助けになった。

ベルリンに戻りバームクーヘンの有名店やベルリンの壁崩壊３０周年を記念してブランデンブルク門のライトアップを見学した。また、アンペルマンショップでグッズを購入するなどベルリン最後の夜は更けて行った。

◆１０月１２日（土）

５時に起床し、ベルリン・テーゲル空港に７時半に到着。前日、台風の影響で空港ダイヤの大幅な乱れが予想されたため搭乗手続きが心配されたがあや先生の迅速な行動で予定通りチェックインができた。

◆１０月１３日（日）

日本時間６時過ぎ定刻通り生徒８名、引率の藤居先生計１０名関空到着。今回の成功の理由の一つは参加した生徒が全員元気であったことである。

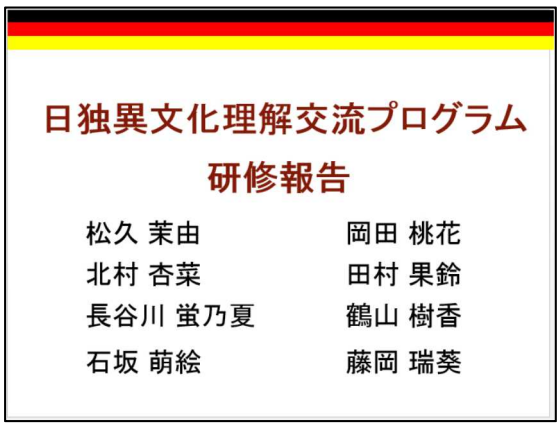
最後に：１２月にFMBG校ストック校長先生よりこの国際交流プログラムを続けていきましょうというメールが届きました。今回の日独異文化相互理解交流が実現できたのは交流振興会、同窓会の支援の賜です。あらためて関係各位に感謝申し上げます。

（ボン・ボヤージュ 39 号～43 号　再録）

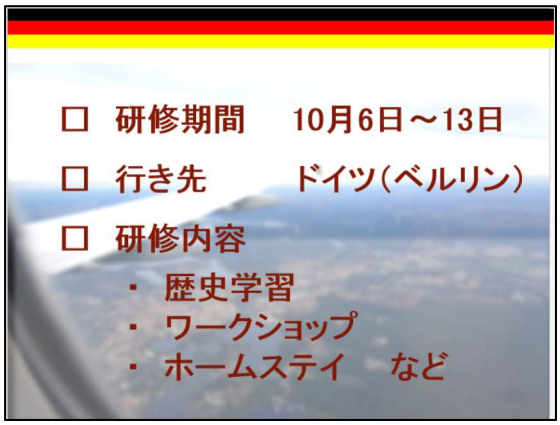
日独異文化理解交流プログラム研修報告

発表者　　松久 茉由、北村 杏菜、長谷川 蛍乃夏
石坂 萌絵、岡田 桃花、田村 果鈴
鶴山 樹香、藤岡 瑞葵

（令和元年 12 月 20 日　体育館にて全校生に対して発表）



今から日独異文化相互理解･交流プログラムの発表をします。最後までよろしくお願いします。



私たち８名は、10 月 6 日から 13 日までの約１週間、ドイツのベルリンへ行ってきました。

この研修の主な目的は、「優れた芸術に触れる」ことにありました。世界最高峰のベルリンフィルハーモニーの演奏会に合わせてベルリンを訪れ、その演目に関連したワークショップを体験する。そのうえでベルリンフィルの生演奏を聴く、という、とても贅沢なプログラムです。

それだけではなく、一般的な語学研修と同じように、ホームステイや観光も体験してきましたので、今から３つの項目にわけて報告します。

まずは歴史学習です。ベルリンの地下には東から西に向かっていくつものトンネルが掘られています。何のためのトンネルかというと、東ベルリンから西ベルリンへひそかに脱出するためのものです。なぜ東ベルリンの人々は西ベルリンへ逃げたのか。そもそもなぜベルリンは東と西にわかれているのか。それを探るにはドイツの歴史をひもとく必要があります。

第二次世界大戦後の 1949 年、ドイツは分断され、自由主義国の「西ドイツ」と、社会主義国の「東ドイツ」が誕生しました。

ドイツの首都ベルリンは、さらにアメリカ・イギリス・フランス・ソ連の４か国によって分割され、東ドイツ内にある西ベルリンは「陸の孤島」のような状態になりました。しかし西ベルリンはアメリカなどの支援により、みるみる復興していき、ソ連が支配する東ドイツや東ベルリンとの経済格差はどんどん広がっていきました。東ドイツの人々は、豊かな生活を求め西ベルリンへ逃げ込んでいきました。1961 年の７月だけで、その数は３万人にもおよんだそうです。人口流出は東ドイツにとっては国の存亡の危機です。そこで東ドイツは、西ベルリンへの人口流出を防ぐために、壁の建設を進めました。いわゆる「ベルリンの壁」は西ベルリンをぐるっと囲むように作られ、全長は 156 kmにもおよびました。

そこから約 30 年、壁は東西冷戦の象徴として町を分断し続けましたが、1989 年 11 月、東ヨーロッパでおこった自由主義革命の中で検問所が開放され、壁は市民の手によって壊されました。

私たちは、ベルリンの壁の一部が残されている、ベルナウアー通りを訪れました。

ベルナウアー駅を降りるとすぐに、壁とパネル写真のある大きな建物が見えてきます。

ここは壁と壁の間の緩衝地帯となっていた場所で、現在は公園のようになっています。ベルリンの壁は２重につくられており、間には 110m の緩衝地帯が置かれていました。

私たちはベルリン在住のフリーライター中村真人さんと合流し、地下世界の発掘や保存をおこなっているアーノルトさんのもとへ向かいました。

アーノルトさんが説明してくれるドイツ語を中村さんに通訳してもらいながら、私たちは逃亡トンネルをみるために建物の内部へ、地下へと進んでいきました。

ベルリンの壁ができるまでは、ベルリン市内の移動は自由でした。なので、例えば家が西ベルリンにあり仕事場が東ベルリンという人は、毎日、東西ベルリンを行き来していました。ところが 1961 年８月 12 日、一夜にして壁（厳密にいうと最初は鉄条網）ができ、互いの通行が禁止されました。その日、たまたまお父さんだけが東ベルリンに出張していた、というような家族でさえ、その日を境に会えなくなってしまったのです。

バラバラになってしまった家族、特に子どもやお年寄りを西側に呼び寄せるために、人々は必死に地下トンネルを掘りました。バレると秘密警察に捕まってしまうので、大きな重機は使えません。大人が四つん這いになって、ようやく進める、高さ 70 ㎝くらいの穴を、手作業で掘り進めていきました。このトンネルは地下 9 m あたりに掘られたのですが、私たちは、はしごを使って地下におり、実際のトンネルを見ました。トンネルというと丸や四角の形をイメージしていましたが、実際は三角でした。必要最小限の高さだけ掘り、土が落ちてこないように木の枠で支えている、そんなトンネルでした。緩衝地帯をこえるためには 140m くらいのトンネルを掘らなければいけません。もちろん覗き込んでも数m先が見えるだけです。狭くて暗い地下で、秘密警察に見つかるかもしれない恐怖と戦いながら、半年くらいかけてトンネルを掘り続けるのです。

私がトンネルを掘る立場だったらどうするだろう……。

「家族を助けたい」、その思いが強くあっても、自分の身を守ることを優先してしまわないだろうか、恐怖心に勝てるだろうか、自分のことよりも家族のために生きられるだろうか……。

短時間ではありましたが、本当に色々な考えがうかびました。

私たちはまだ子どもなので、親の気持ちはわかりませんが、親というのは、子どものためなら自分の命をもかける、子どものためなら何でもできる、そう思っているのかもしれません。

このトンネルから、人間の「執念」や「愛」といった感情が伝わってきました。

暗くて、ひんやりする地下から地上にでると、明るくおだやかな陽射しが降り注いでいました。

自分たちが歩いているところが、30 年前までは東西ベルリンを隔てる緩衝地帯であったこと、この下には逃亡トンネルがあったこと、なんとかトンネルから地上に出てこれても、ここで秘密警察に銃撃され亡くなった人がたくさんいることなどを考えると、最初に見た景色とはまったく違うものに見えました。

ドイツという国は、自分たちにとってマイナスの歴史や事実があっても、それを隠さず向き合っている、そのように感じました。

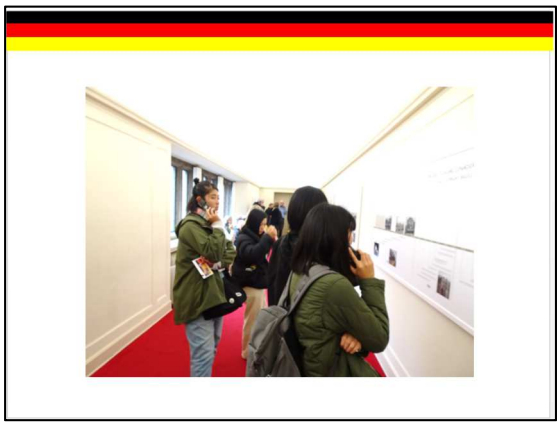
次に報告するのは、ポツダムにある「ツェツィーリエンホーフ宮殿」です。

この宮殿を訪れたのは、ここが日本に無条件降伏を求めた「ポツダム宣言」が出された場所だからです。

この宮殿はもともと、ドイツの皇太子夫妻のために建てられたものです。その後、第二次世界大戦が終わる直前に、ソ連がポツダムを占領し、この宮殿もソ連のものとなりました。

ポツダム会談はソ連がホスト役となり準備が進められたため、ソ連の存在を誇示するために、宮殿の中庭には星形の花壇が作られました。

私たちが訪れたときには、何も植えられていませんでしたが、ここには本来、赤いゼラニウムが植えられています。赤と星印は、共産党の象徴です。



受付で日本語のオーディオガイドを借り、説明を聞きながらパネルを読み進めていきます。やはり日本語で説明を聞くと、すっと頭の中に入ってくる感じがあります。観光名所といわれるところでも、日本語のオーディオガイドが置いてある場所は珍しいので、この宮殿にはきっと、たくさんの日本人が訪れるんだろうな、と思いました。

ここが会談が行われた大会議室です。議題の中心になったのは、敗戦国ドイツの戦後処理問題でしたが、もうひとつ、裏の議題として、日本の降伏と新型爆弾の使用がありました。

この会談が始まる前日の、1945 年 7 月 16 日、アメリカは原爆実験を成功させています。7 月 25 日、アメリカ大統領トルーマンは、「8 月 3 日以降、広島、小倉、新潟、長崎のいずれかに最初の原爆を投下する」命令書を承認したといわれています。

翌日の 26 日にポツダム宣言が出されているので、ポツダム宣言が出されたときには原爆に関しての結論はすでに出されていたことになります。

宮殿の裏手に回ると、湖が見えました。

この湖の手前にも 30 年前までベルリンの壁があり、このあたりはソ連の秘密警察の基地があったそうです。

日本の歴史を勉強するために訪れた場所で、ドイツの歴史を知る。バラバラだった歴史が、どんどん自分の頭の中でつながっていくような感覚をおぼえました。

ベルリンからは少し離れた場所でしたが、来

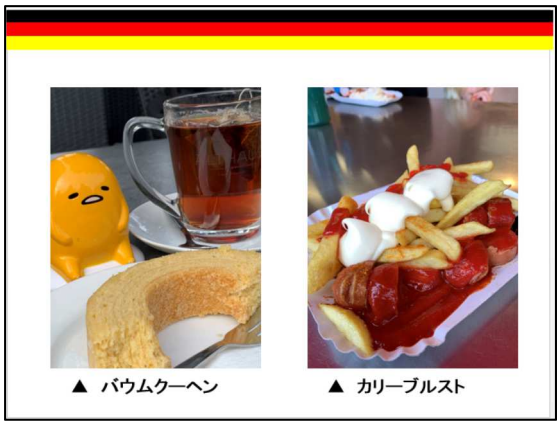
てよかったと思いました。

少し真面目な話が続いたので、ここで休憩の意味を込めて、ベルリンの食べ物の話をします。

まずは、ドイツのカフェ文化について。

ドイツ人はよくコーヒーを飲みます。ビールもよく飲んでいるようでしたが、コーヒーも飲んでいました。

先生方によると、どのカフェでコーヒーを飲んでもおいしかった、ということでした。ラテ・アートは基本はいっています。とてもおしゃれです。



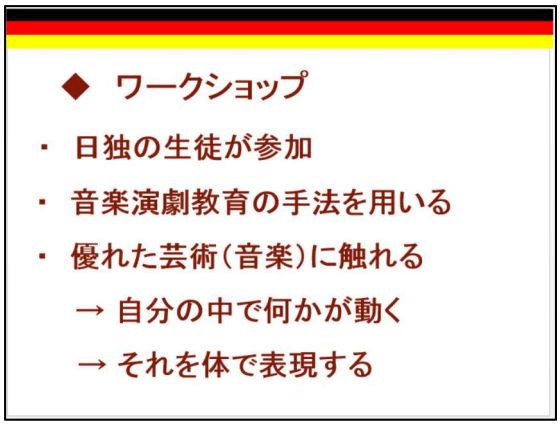
次は食べ物です。

ドイツといえば、バウムクーヘンです。日本には、第一次世界大戦の捕虜として日本にやってきたドイツの菓子職人・カール＝ユーハイムによってバウムクーヘンが持ち込まれました。彼の事業を継承するのが、神戸に本社をおくユーハイムです。

引率教員の藤居先生たっての希望で、私たちはポツダム観光の帰りに、王室御用達のお店に行きました。食べてみた感想は、賛否両論でした。藤居先生は「シナモンの風味が強めで、生地はすこしパサパサしているので、日本のほうがおいしい」とおっしゃっていましたが、校長先生は「本場のほうがしっとりとしていておいしい」とおっしゃっていました。

写真はベルリン名物「カリーブルスト」です。香ばしく焼いたソーセージを一口サイズに切り分け、カレー粉とケチャップ、お好みでマヨネーズをたっぷりかけて食べるという、いたってシンプルな食べ物です。街角の屋台のような場所で気軽に買って食べるファーストフード的な存在で、日本風にいうとＢ級グルメです。写真の通り、私たちが食べたのは、フライドポテトつきのカリーブルストです。半分くらいまではおいしく食べられましたが、途中からは正直きつかったです。ベルリン名物なので食べてよかったですが、一回食べたら十分、という食べ物でした。

では、休憩はこのくらいにして、本題に戻ります。次はこの研修のメインプログラムであるワークショップについて報告します。



このワークショップは、日本人８名とホームステイ先のドイツ人８名が協力して行うものでした。この研修を企画してくれたヴィルデ・あや先生が、ドイツで学ばれた「音楽演劇教育」の手法を用いてワークショップは進められます。

簡単にいうと、あや先生やドイツ人のブリッタ先生が与えてくれた「きっかけ」をもとに、私たちは自分の中で動いた感情や考えを体を使って表現していく、というものです。

私たちは、自分の感情や考えを表に出したり、ましてやそれを体を使って表現することなんて、ほとんどしたことがありません。ドイツ語もわかりません。

そのうえ、「思い込みは捨ててほしい」と、あや先生に言われていたので、日本での事前学習もまったくしていません。

楽しみ半分、不安半分という状態で、このワークショップは始まりました。

１日目のワークショップは、ベルリンフィルハーモニーコンサートホール内の会議室で行われました。

私たちの集合は 9 : 45 だったのですが、先生方は準備のため、早くから館内におられたようです。先生方はワークショップで使うちょっとした打楽器を取りに、ベルリンフィルの楽器倉庫にも行かれたようで、普通では経験できないことだ、と喜んでおられました。

ワークショップは、まず、リズムに合わせてドイツ語と日本語の両方で自己紹介をするところから始まりました。その後は、日本人、ドイツ人それぞれの人柄を楽器を使って表現したり、ドイツのイメージや日本のイメージを身振り手振りで表現するという課題に取り組みました。

私たちがイメージするドイツ人は「ビールをよく飲む」「背が高い」といったもので、それをジェスチャーで伝えると、「そうそう！合ってる！」というような反応が返ってきました。逆にドイツ人がイメージする日本人は「くつを脱いで家にはいる」とか「何かが起こったときには互いに謝りあう」というようなものでした。例えばみなさんは、前からやってきた人とすれ違う時に肩があたってしまったとすると、どちらが悪いというわけではなく、互いに謝りあいませんか？これがドイツ人にとっては不思議だそうです。

自分たちの「当たり前」が国や文化が変われば当たり前ではなくなる。そこに気づけたのがおもしろかったです。

そしてこのワークショップは、シューマン作曲の交響曲第３番「ライン」がテーマとなっていました。ラインとは「ライン川」のことです。

私たちは、交響曲第３番を聞きながら、感じたことを１本の線で表現する、その線を体を使って表現し、リレー形式でつないでいく

ような課題に取り組みました。言葉は使いません。

同じ曲を聴いても、感じ方は人それぞれで、それがとてもおもしろかったです。日本人だから同じように感じるというわけでもなく、ドイツ人だから合わないということでもありません。

音楽の感じ方は人それぞれ。その表現の仕方も人それぞれです。それでも相手が考えていること、感じたことはわかりました。大事なのは、伝えようとする気持ち、分かろうとする気持ちなんだと思います。

普段使っている「言葉」というコミュニケーションツールが制限されても、伝える側は、表情や体の動き、身振り手振りを使って、できるだけわかりやすく伝えようとする。自分基準で考えているだけでは「伝えたつもり」にしかならないので、コミュニケーションは成立しません。相手の立場に立って考え、自分が思っている以上に表情は豊かに、動きは大きく、熱意をもって積極的に表現すれば、自分の思いはなんとか伝わることを実感しました。

コミュニケーションをとろうとしている相手の国の言葉は、しゃべれないより、しゃべれたほうがいいと思います。

しかし、言葉はコミュニケーションツールの一つであって、すべてではありません。
言葉がわからないからといって消極的になるのではなく、なんとかしようと自分から積極的に動けば、本当になんとかなります。

日本語をしゃべっている者どうしでも、意思表示しなければ互いに考えていることはわかりません。この研修で体験した、「とにかくやってみる！」というチャレンジ精神を、これからの生活でも実践していきたいです。

また、２日間のワークショップを通じて、ドイツ人と日本人の国民性のちがいもよくわかりました。

ドイツ人は、自分の考えをきちんと主張します。「間違っていたらどうしよう」、などと、ひるんでいる様子は全くありません。思いついたことをすぐ口にする感じです。
「この意見はこの場にふさわしいか」、とか、「これを言うと周りからういてしまうか」、と考えている様子もなく、とにかく自分の考えを主張します。私たちには、時にそれが単なるワガママとうつることもありましたが、誰かが意見を言うと、私も私も、と次々に発言が続いていく様子には圧倒されたし、とても驚きました。ドイツ人は物事をあやふやにごまかして終わることを好まない、徹底的に話し合う、議論しあう人たちだと感じました。

一方日本人は、自分の意見を発言することにためらいを覚える感じです。発言する前に一度、自分の頭の中で整理してから発言する。だから発言のタイミングとしてはドイツ人よりも遅れてしまいます。
また、日本人は、誰かが自分と同じ意見を言ったとすると、あえて同じ意見は言いません。時間をとらせて同じ意見を言っても仕方がないと、感じるからです。
それが時として受け身に映ったり、消極的にとられたりしました。

しかし私たちが褒められたこともあります。それは一生懸命に取り組むということです。ワークショップを担当してくださった先

生が出した課題に対して、私たちは「好き、嫌い」は別にしてまずは取り組んでみます。私たちのために考えてくれたプログラムだし、これを準備するのにどれくらいの時間がかかったんだろう、と思うと失礼な態度はとれません。でもドイツ人のなかには「それをやる意味がわからない」とか「おもしろくない」という理由で人の話を聞かずにしゃべったり遊びだしたりする子もいました。私たちからすると、そういう態度がとれてしまうのは不思議だったし、信じられなかったです。

あとは、片づけや掃除です。自分たちが使わせてもらった部屋の片づけや落ちているゴミを拾うのは私たちにとっては当たり前のことです。学校でも毎日掃除はするし、日本には「立つ鳥跡を濁さず」ということわざもあります。できて当然だと思っていたことですが、無意識に動けるくらいに習慣となっていてよかったと思いました。

日本を出て初めて、環境が変わって初めて、自分たちのことが客観的に見れたような気がします。

自分たちの良いところはそのままに、さらにドイツ人から学んだ積極性を足していければいいな、と思いました。

ワークショップも無事に終わったあとは、いよいよベルリンフィルハーモニーの鑑賞です。フィルハーモニーがきれいにライトアップされていて、それだけでテンションがあがりました。

写真はオーケストラのシンボルマークです。五角形を３つ並べたこのマークは「人間、音楽、空間」をあらわしているそうです。音楽は、空間とそこにいる人間があってこそ成り立つ、という理念からつくられました。

ホール内は撮影不可だったので写真はないのですが、パンフレットから抜粋したものを見てください。私たちの席は、指揮者と向かい合って座る「バックステージ」とよばれるところでした。ステージ中央のティンパニ奏者から直線距離で２メートルくらいしか離れていない席で、指揮者の表情をみながら、演奏者の息遣いを感じながら聞く演奏は、言葉にならないほど素晴らしかったです。

また、ベルリンフィルの演奏者たちは、とても楽しそうに演奏していました。自分が演奏していないときも、音楽を楽しんでいるのが目で見てわかったし、よい演奏に対しては演奏中でも「よかったよ」と隣の人に話しかけている人もいました。楽団の雰囲気としては「自由」そのものでした。一流の技術をもった人々が集まっているからこそ生み出される自由。ブラボーの一言です。

▲ 信号機「アンペルマン」

ここでもう一度、休憩です。

ドイツの歩行者用信号機は、「アンペルマン」

とよばれる人の形をしたマークになっています。これはもともと東ドイツで使われていたものです。

1990 年に東西ドイツが統一されたとき、信号機は西ドイツのものに置き換えられる予定でした。しかしアンペルマンが、かわいらしいデザインで親しみやすいこと、デザイン的にも優れていることから、撤去しないでほしいという声があがったそうです。
現在では、ベルリンの正式な歩行者用信号機として使われています。

写真は「アンペルマン・ショップ」です。アンペルマンはたくさんのグッズが作られており、ベルリンみやげとして人気があります。私たちもアンペルマンショップで買い物をしました。

藤居先生もたくさんのアンペルマングッズを買っていたので、学校のいたるところにアンペルマンがいると思います。みなさん探してみてくださいね。２年次の先生方を中心に探せばすぐに見つかります。

次は、ベルリンの博物館についてです。

ベルリンには「博物館島」というエリアがあり、ユネスコの世界遺産にも登録されています。ここには５つの博物館があり、先生方が行ってこられたようです。

藤居先生いわく、おススメは、「新博物館」と「ペルガモン博物館」だそうです。「新博物館」は、古代エジプトに関する約 9000 もの品が展示されているところで、有名なのが、古代エジプトの王妃、「ネフェルディティ」の胸像です。実物の写真撮影は不可ですが、レプリカならＯＫで、レプリカは触ることもできます。

「ペルガモン博物館」には、ブルーが鮮やかなバビロニアの「イシュタール門」などが再現されていて、そのスケールに圧倒されるそうです。イシュタール門が再現されていることはガイドブックにも載っているので先生も知っていたようですが、ガイドブックに載っていない「ハンムラビ法典」のレプリカがあったことに驚かれたようです。「ハンムラビ法典はフランスのルーブル美術館に行かないと見られないと思っていたのに、レプリカとはいえベルリンで見れたことに感動」とおっしゃっていました。歴史や芸術好きな人にはオススメの場所です。

では本題に戻り、最後にホームステイの報告をします。

ドイツについた２日目から、私たちはホームステイ先で４泊させていただきました。
まずはホテルにドイツ人ペアが来てくれて、一緒にベルリン市内の観光に向かうところから始まりました。

私たちはドイツ人ペアと事前にメール交換をしていたので、互いの顔はすぐわかりまし

た。挨拶はお辞儀ではなくハグをするので、少し恥ずかしかったです。ペアの年齢は自分たちよりも年下の子たちが多かったです。

ドイツ人ペアたちは、学校で日本語を勉強している人たちだったのですが、勉強を始めてから数か月の人から、日本に１年弱留学していたという人まで様々でした。なので日本語が話せないペアとは、互いに片言の英語でしゃべりました。みんなで行動するときは、日本語がペラペラのドイツ人が日本語でしゃべってくれたりしました。

私たちはみんなスマホに「グーグル翻訳」を入れていたので、どうしても困ったときは、それを使ってコミュニケーションをとったりしました。

ちなみに、私たちは海外用の Wi－Fi を持って行きましたが、１週間程度の海外旅行なら、1.1 ギガあれば十分だと思いました。

ホームステイ２日目は、それぞれのホストファミリーと過ごすフリーの日でした。
ほとんどの人はベルリン市内の観光に行きました。

街中で買い物をしたり、観光名所に行ったりと、過ごし方は様々でしたが、観光をする中で驚いたことがいくつかあります。

一つはトイレです。街中でトイレを使うとお金がかかります。事前に聞いていましたが、いざ体験すると少しドキドキしました。

二つ目は写真です。観光名所近くには、楽器を演奏しているパフォーマーや色々な格好をした人たちがいるのですが、写真を撮ったりするとお金を要求されます。電車にもパフォーマーが乗ってきていきなり演奏を始めるのですが、この時にも動画をとったりしている人のところに行ってお金を要求します。

日本にはいわゆる「チップ」の習慣がないので、こういうところは最後まで慣れませんでした。

ご飯を食べに行ったときにレジで会計をするのではなく、テーブルの上にお金を置いて出ていくところもびっくりしました。

ホームステイ先では、一緒にお菓子をつくったりゲームをしたりＤＶＤを観たりして過ごしました。

ドイツ人ペアと一緒に「千と千尋の神隠し」を日本語で観た人もいたのですが、分からない日本語がでてくるとすぐに聞いてきたそうです。とても積極的で熱心に勉強している印象です。

食事は家によって違いましたが、ジャガイモはよく出てきました。茹でただけのものやポテトサラダなどです。ポテトサラダは日本のものよりもお酢がきいていて、さっぱりとしていました。パンは堅めでした。料理はあまり温かいものはありませんでした。電子レンジがない家もあったので、温めて食べるという習慣がないのかな、と思いました。

ドイツ人は、大人も子どももそれぞれの時間を大切に過ごしているという印象をもちました。私たちがドイツを訪れた時、ドイツは「秋休み」期間中でした。なので、お父さんとお母さんは旅行に行っていて、子どもだけが家にいる、という家庭もありました。日本の親子関係とは、かなり違った関係性、距離感だと思いました。

ホストファミリーのお父さんやお母さん

も、私たちにべったりというわけではなく、適度な距離感を保ちながら接してくださいました。大人は子どもを尊重し、ある程度の年齢になったらいろいろなことを本人に任せる、その代り、責任も子どもがとる、という感じなのかな、と思いました。

５日目の朝、ホテルでお別れの朝食会をしました。

ステイ先のお父さんやお母さんも来てくださり、みんなで朝食を食べました。４泊のホームステイは長いようで短くもありました。いざ、お別れとなると、とても寂しかったです。

お別れ会の最後には校長先生が英語でお礼を述べられました。コーディネーターの方が「ドイツ語に訳しましょうか？」とお父さんやお母さんに言われていましたが、「今の英語で十分わかりました。通訳は不要です」ということでした。校長先生はとてもうれしそうにされていました。

私たちが８日間の研修を通して学んだことはたくさんあります。その中でも一番大きなことは、「意思表示をする。そして自分から積極的に動く」ということです。

知らない国で、初めての体験ばかりで、とても不安な気持ちでいっぱいでしたが、不安だといって黙っていては、相手に何も伝わりません。困っていることがあれば、自分から「助けて」と言う。言葉がわからなかったら、表情や身振り手振りで伝える。自分の気持ちをなんとか相手に伝えようとしているうちに、コミュニケーションツールは言葉だけではないということに気づくことができました。

そして自分の気持ちや感情をいったん表に出してみると、自分でも知らなかった自分を発見できて、びっくりしました。「自分にはこんな面もあったのか」「やればできるやん、私」と自分で自分を褒めてあげたい場面もたくさんありました。

異国の地でここまで行動できたんだから、日本国内だったら、もうどこでも一人で行ける、と思います。

誰かに頼って人の後ろばかりついていく自分が、ドイツに行ったことで少し変わったと思います。

日本に帰ってきてから、しゃべるときに身振り手振りなどが加わり、少しオーバーアクションになっているような気がします。自分の気持ちを伝えようとするときに、言葉だけではなく、体全体を使って表現する、という経験がいきているんだと思います。

ドイツから帰ってきて、英語のリスニングに取り組む姿勢が少し変わりました。前までは「どうせ聞いてもわからんし」とあきらめていた面もあったのですが、帰国後は、「なんとか聞き取ってやろう」と積極的に授業に参加するようになったと思います。

ドイツに行く前は間違うことを恐れて、セコ先生にもあまりしゃべりかけられなかったけど、帰国後は「間違ってもいいや、なんとかなる」とふっきれて、自分からしゃべりかけられるようになりました。

日本を離れて、初めて日本の良さもわかりました。

帰国後、久しぶりに家でごはんを食べたとき、「お母さんの作る料理はこんなにおいしかったんだ」と感動しました。慣れ親しんだ味もそうだし、何より愛情を感じました。

家族だけではなく友達から「おかえり！」と言ってもらえた時、「ああ、日本に帰ってきたんだ」と実感しました。

平凡で、何気ない毎日が、こんなに貴重でありがたいことだとは知りませんでした。

自分たちが当たり前だと思っていたことは、何ひとつとして当たり前ではない。当たり前にあるものの裏には、たくさんの人の存在がある、そのことに気づきました。

私たちは加古川南高校の代表としてこの研修に参加させてもらったので、私たちが学んだこと、感じたことは、これからの生活にいかし、みなさんに還元していきます。

自分たちとしては、研修に行く前と後では、かなり考え方や行動が変わったと思っているのですが、それがみなさんに伝わっているかはわかりません。

変わったつもり、変えているつもり、ではなく、みなさんの目から見てわかるように、自分の行動を変えていきます。貴重な体験をさせていただいて、ありがとうございました。

これで発表を終わります。ご清聴、ありがとうございました。

付　録

神戸新聞 2019年09月18日 水曜日 面名 東播 １４ 27ページ

ドイツ訪問を前に歴史や習慣を学ぶ生徒たち＝加古川南高校

独の歴史、習慣学ぶ

総領事館広報招き 来月の訪問を前に

加古川南高校の生徒

加古川南高校（加古川市加古川町友沢）の生徒8人が10月6～13日、ドイツのベルリンを訪れ、芸術作品を通し現地の高校生と交流する。出発を前に、生徒たちは同国の歴史や習慣などを学んでいる。

同高として初めて取り組む異文化理解・交流プログラムで、1～3年の吹奏楽部やダンス部の部員らが参加する。

現地では、地元の高校生とともに同国の作曲家ロベルト・シューマンの交響曲第3番「ライン」を題材として表現方法を考えるワークショップを行う予定。その後、世界的なオーケストラの「ベルリンフィルハーモニー管弦楽団」のコンサートで同作品を鑑賞する。

同高では10日、大阪・神戸ドイツ総領事館の広報の多田亜希子さんを招き、関連する知識を学ぶ講義があった。多田さんは、第2次世界大戦後に東西に分かれたが、30年前にベルリンの壁の崩壊によって、統一された過去を紹介。日本との関係では「MANGA」と表現される日本の漫画や、すしなどの日本食が人気であることなどを説明した。

生徒から写真を撮る際の注意点についての質問があり、多田さんは「手のひらを正面に向けて手を挙げるのは、ナチスを想像させるため厳禁」などと答えた。

1年の岡田桃花さん(15)は「もともとドイツの歴史に興味があり、実際に行ってみたかった。講義では、鼻をすする行為が嫌がられることが意外で驚いた」と話していた。（切貫滋巨）

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。

『ドイツニュースダイジェスト Nr.1109 ベルリン発掘の散歩術　中村真人』

逃亡トンネルを掘った人たちと伝える人たち

1 November 2019 Nr.1109

10月のある日、地下鉄U8のベルナウアー通り駅に赴いた。この週、兵庫県の加古川南高校とベルリンのフェリックス・メンデルスゾーン＝バルトルディ・ギムナジウムとの間で、日独の女子生徒たちによる異文化交流プログラムが行われた。このプログラムを企画した知人の働きかけにより、当時地下に掘られた逃亡トンネルをテーマにした日独合同ガイドツアーが実現することになり、その通訳を頼まれたのだった。

Junges Museumは歴史博物館の中にある

生徒さんたちや同行の先生方と落ち合ってから、壁跡に面した建物の前で「ベルリン地下世界協会」のディトマール・アーノルトさんに会う。ベルリンの地下世界についての本も出版している、この分野では著名な方である。

第二次世界大戦の空爆で、ベルリンではアパート全体の37%が破壊され、戦後15年経ってもこの街は住宅不足に陥っていた。そのため、父親だけ西側の実家にというように、家族が東西別々に住むこともあったそう。しかし、1961年8月に壁の建設が始まり、彼らは突然会えなくなってしまう……。

この時期、東側に住む多くの人が逃亡を試みている。大人は車の中に隠れたり、嘘の口実をつくったりして検問をすり抜ける可能性がわずかながらもあったが、子どもがそんな極限状況に耐えられるわけがなかった。

『ドイツニュースダイジェスト Nr.1109 ベルリン発掘の散歩術　中村真人』

「子どもを持つ家族が西に逃げようとする場合、1番可能性があったのは、地下トンネルで脱出することだったんです」。1人の親として、アーノルトさんの語る歴史が一気に身近なものに感じられてくる。地下に降りると、トンネルを掘る工程を再現した一角が。1960年代、ベルナウアー通りでは、西側の支援グループにより西から東に向かっていくつものトンネルが掘られた。大きな音を立てられないため、人々は無線でやり取りした。作業は慎重に進められ、1日数十センチしか掘れない日もあったという。

ベルナウアー通りの壁の緩衝地帯跡。かつての逃亡トンネルの上には、その跡を示す線が敷かれている

何カ月もかけて掘り進めても、途中で情報が漏れて、たどり着いた先にシュタージ（秘密警察）が待ち受けていたことも。有名な成功例は57人が逃亡した1964年の「トンネル57」だが、いざ脱出という時、高さ70センチしかない狭いトンネルを前にして、恐怖のあまりパニックになった人も出たという。忠実に再現したトンネルの前に立つと、一層身に迫ってきた。

さらに地下深くへ下る。驚いたことに、アーノルトさんらは、この空間を埋め尽くしていた瓦礫を数年かけて取り除き、調査中に本物のトンネルを発見。それは目的地まであと2メートルの地点で終わっていたという。トンネルを掘った人たちもすごいが、歴史を掘り起こす彼らの執念にも感嘆した。

地上に戻ってから、加古川南高校の原実男校長がしみじみとおっしゃった。「歴史は本物に触れるのが1番ですね。人々を苦しめた愚かな歴史も、ありのままに残すことが大事なのだと思います」。この日案内した10代半ばの生徒たちにとって、壁があった時代というのはもう遥か昔のこと。でも、彼女たちが何かを感じてくれたことは、ツアー中の眼差しからうかがえた。